

イタリアに於ける Goethe の「ものの見方」について（その二）

瀧 川 一 幸

目 次

- 1 はじめに (Goethe 文学の特性とアプローチの方法)
- 2 若き Goethe の世界観と芸術観
- 3 若き Goethe の世界観と芸術観の根底にある問題性
- 4 前期ヴァイマル時代の自然研究の始まりと Goethe の「ものの見方」について
- 5 イタリアに於ける Goethe の「ものの見方」について
 - 5-1 イタリア旅行と Goethe の「ものの見方」との関連について
 - 5-2 イタリアに於ける Goethe の「ものの見方」の根底にあるもの
 - 5-3 イタリアに於ける Goethe の基本的な「ものの見方」とその特徴
 - 5-4 植物観察に於ける「ものの見方」について
 - 5-5 美術・芸術品に於ける「ものの見方」について
- 6 おわりに

(1)
(その一は 1 から 3 まで。4, 5, 6 はその二に入る。)

4 前期ヴァイマル時代の自然研究の始まりと Goethe の「ものの見方」について

前期ヴァイマル時代というのは、1775年11月7日ヴァイマル到着の日から1786年9月3日早朝イタリアへ向かって旅立った日までのほぼ十年という長期間である。さてこの時代になって初めてこの全期間を貫く新しい三つの活動が始まる。その第一はこの時代のほとんどの時間を捧げたヴァイマル公国の行政への参加である。その第二は、Goethe の生を彩る数々の恋の中でもきわめて珍しく長期間続いたシュタイン夫人との恋である。そして第三には、この4のテーマとしたい自然研究の始まりである。これら三つはそれぞれに Goethe

の精神発展に深く関わり寄与している。しかもそれぞれが単独に関わりを持つという形ではなく、それぞれが相互に深く関係しながらである。それ故Goetheのこの時代の精神発展を述べようとすれば、これら三つの説明を外すことはできないであろう。しかしこの小論はGoetheの「ものの見方」を扱うものである。したがって彼の「ものの見方」を最も純粋な形で発展せしめた自然研究に絞って、彼の「ものの見方」を見てみたい。確かにヴァイマル公国の行政への参加は、Goetheに現実の責任ある仕事を処理することを通して、彼の自我を鍛錬し、また多種多様の貴重な人生体験を贈ることによって、経験豊かな一人前の男として成熟させたであろう。何より若きGoetheのこれといって責任ある仕事を持たなかった自由な立場が、若きGoetheの天賦の想像力を孤独の中で高く飛翔させたに比して、ヴァイマル公国の行政への参加は、否おうなしに彼を現実の中へ追いやったであろう。またシュタイン夫人との心と心の交際は、Goetheの他の恋とは違って瞬間的に高く燃え上がり易いかのWerther的心情を純化・鎮静化させるという教育的な働きをしたであろう。そしてこういったことが、Goetheの「ものの見方」に影響を与えないはずがなかろう。しかしGoetheの「ものの見方」の方法・発展という観点から見た場合には、そのつどそのつど対象が変わる行政の仕事が、Goetheの「ものの見方」の方法・発展に一定の方向を与えるほど大きな寄与をなしたとは思えない。またシュタイン夫人との恋は、主として心の問題である。この期間若きGoetheからの発展課題としてのGoetheの問題となったのは、後で詳述するが、心の外の世界、つまり外なる自然である。こうした理由で筆者は、この期間の自然研究の始まりに焦点を当ててGoetheの「ものの見方」を見てみたい。

* * *

Goetheは子供時代から絵画に親しんでいた。学生時代も美術館の訪問やラファーターの観相学やラインの旅など、眼の人といわれるだけあって、詩と真実は、彼の観察の機会を述べる個所は多い。しかし、Goetheがわざわざ観察そのもののために観察を始めたのは、この前期ヴァイマル時代の自然研究に於いてである。それは、鉱物学、地質学、植物学、比較解剖学というようになら幅ひろいものである。これらは、たいていヴァイマル公国の大臣としての

行政の機縁で始められたものが多い (Goethe は、自然研究を私は必要から始めたと言っている)。しかしこれが一時的なものに終わるのか、生涯の研究となるかは、その人の内奥の問題と深く関係がある (Goethe の自然研究はこれ以後彼の死まで続く)。こういった意味で Goethe の自然研究の始まりは、若き Goethe の世界観・芸術観の根底にあった問題性と深い関係を持っている。ここでもう一度この問題性を取り上げ、自然研究の始まりとの関係を述べてみよう。

若き Goethe の制作方法 (それ故 Goethe の「ものの見方」と言ってよい。なぜなら制作方法とはものの表象方法そのものだから) は、<完全な孤独の中での想像力の遊びもしくは高まり>であった。この心のあり方は、一方ではすばらしい文学的傑作を生み出したが、他方では、Goethe の生を危機の中に落としかねない性質を持っていた。すなわち孤独とは、<眼前の生>を自己の内部から締め出し、自己の内部に閉じこもることによって初めて成立する。この孤独の中で、想像力は<眼前の生>よりも自分の力によって自分の内部に紡いだより美しい世界のほうを愛しやすい (これはきわめて自然に起こり、ほとんど気づかない)。ここに<眼前の生>を歪めたり、誤解したりする最大の原因があったのである。そしてこのことから、例えば Werther のように、現実の生を、<眼前の生>を愛するよりも<完全な孤独の中での想像力の遊びもしくは高まり>によって作られた心の内部の世界のほうを愛し、現実の生を厭わしく思う人生嫌悪という病気にかかる危険性があった。このことの一部始終を描いたのが、「若き Werther の悩み」である。このことは、言葉を変えれば、天賦の才である想像力によって人間の内部にばかり歩んではならない。人は<眼前の生>へ、現実へ、現在へ眼を転じ、ここに生きなければならないということであった (もちろん想像力が新しい文化を創造するという積極的な意味があることを忘れてはならないが)。前期ヴァイマル時代の前述した三つの新しい活動もみなこの方向への転轍である。またこのことは、前述したように彼の文学作品の中にはその核として彼の実存が刻印されるという特性によって、彼の文学作品の中にも次のように記述されている。まず第一には、若き Goethe の自伝小説といってよい<ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命>の中で、フォン・

C氏は、主人公ヴィルヘルム（若き Goethe の分身）の作品を、

「Dieses Stück, sagte er, so wohl es mir gefällt, ist nur von innen heraus geschrieben, es ist ein einziger Mensch, der fühlt und handelt. Man sieht, daß der Autor sein eignes Herz kennt, aber er kennt die Menschen nicht. この作品は非常にいいと思うが、ただ内面からだけ書かれている。感じ、行動しているのは一人だけなのだ。作者が自分の心を知っているのはわかるが、人間を知らないのだ。⁽²⁾」

と批評している。

また第二に、同じ作品の別の個所でアウレーリエは、同じく主人公を、

「Mit Verwunderung bemerkte ich an Ihnen den großen und richtigen Blick, mit dem Sie Dichtung und besonders dramatische Dichtung beurteilen. Die tiefsten Abgründe sind Ihnen nicht verborgen, und die feinsten Schattierungen sind Ihnen bemerkbar. Ohne die Gegenstände in der Natur gekannt zu haben, erkennen Sie solche im Bilde; es scheint eine Vorempfindung der ganzen Welt in Ihnen zu liegen, die durch die harmonische Berührung der Dichtkunst geregt und entwickelt wird. あなたは、文学、とくに劇文学を見る狂いのないすてきな目をおもちだということに、わたくし驚いていますの。作品のどんな深いところもあなたは見のがしませんし、どんな微妙なニュアンスもとらえてしまいます。自然界でその物をご存知なくとも、描かれたその物はちゃんとおわかりになりますのね。全世界の予感があなたのなかに宿っていて、それが文芸の諧音にふれると動きだし、くりひろげられるように思われます⁽³⁾」

と最大級に彼の天賦の文学的才能（つまり想像力）をほめる。この中で「自然界でその物をご存知なくとも、描かれたその物はちゃんとおわかりになりますのね。」という言葉は、若き Goethe の制作方法を裏書して記憶に留めておいてよい。しかし、アウレーリエは、これに続けて、

「Denn wahrhaftig, fuhr sie fort, von außen kommt nichts in Sie hinein! Ich habe nicht leicht jemanden gesehen, der die Menschen, mit denen er lebt, so von Grund aus verkennt wie Sie. だってあなたは外からは何も受けつけようとなさらないでしょう。あなたほど、いっしょにおられる人たちのことを根本から見あやまっている方もめったにないと思いますわ⁽⁴⁾」

とヴィルヘルムの現実を見る眼の無さを批判する。この批判に対してヴィルヘルムは、

「Ich habe von Jugend auf mehr einwärts als auswärts gesehen, und da ist es sehr natürlich, daß ich den Menschen bis auf einen gewissen Grad habe kennen lernen, ohne mich auf die Menschen im geringsten zu verstehen. 小さいころから、外を見るよりは内のほうだけ見てきたものですから、人間というもののある程度は知っても、その具体的な姿を理解するということが全然できないのです⁽⁵⁾」

とアウレーリエの批判を是認している。この言葉ほど若き Goethe の「ものの見方」を端的に批判している言葉もないであろう。つまり、ものをいつも内側から見ていて、想像力でいっぺんにわかってしまうのである。といっても一番身近な者ですら自分の眼ではよく見ていないのである。このため主人公ヴィルヘルムは自分の好むように現実を見てしまう癖があり、このためいろいろ不幸に陥ってしまう（その第一の例は、初恋のマリアーネの現実の実態が彼には見えなかったことを想起せよ！）。

また第三として、Goethe は「Der Verfasser teilt die Geschichte meiner botanischen Studien mit.」の中でも、ヴァイマール時期以前の自分の精神活動は、当時「schöne Literatur 美しい文学」と呼ばれていたものに結び付けられていたのに対して、

「Von dem hingegen, was eigentlich äußere Natur heißt, hatte ich keinen Begriff, und von ihren sogenannten drei Reichen nicht die geringste Kenntnis... (一部省略) ... Die ersten von mir herausgegebenen poetischen Versuche wurden mit Beifall aufgenommen, welche jedoch eigentlich nur den innern Menschen schildern, und von den Gemütsbewegungen genugsame Kenntnis voraussetzen. その反対に、正しくは外的自然といわれるものについて、私はなんの概念ももっていなかった。そしていわゆる自然の三界[動物・植物・鉱物]についても、ごくわずかの知識すらなかった。…… (一部省略) … 私が出した最初いくつかの文学上の試みは囃^{わづ}菜をもって迎えられた。しかしそれらの作品はもともと人間の内面だけを描写するもので、心の動きについてじゅうぶんの知識を前提としている⁽⁶⁾」

と述べている。

さて上に引用した三つの Goethe 自身の証言は、筆者が前述した問題点と同じ点を述べている。すなわち若き Goethe の世界観・芸術観の根底にある問題

性として、外的自然を正しく見ることが、前期ヴァイマル時代の課題として残ったのである。というのは、彼の生は、確かに文学作品という形で、＜完全な孤独の中での想像力の遊びもしくは高まり＞の中で純化・高揚されようとも、決して想像力の紡ぐ内部の世界に生きることができず、あくまでも眼前にある現実の中にしか生きてゆけないからである。そしてこの現実の中に生きることが、外的自然の恣意のない正しい認識を必要不可欠なものとしたのである。言葉を変えるなら、現実が Goethe に恣意のない正しい外的自然の認識を要求したのである。

こうして人間の外なる自然 (äußere Natur) の認識のための一方法として前期ヴァイマル時代に自然研究が始まる。最初にこの時代の概括を述べると、この時期にはまだGoetheの眼は、事物の根源にまで届いていない。それはイタリアのシチリアでの「原植物の発見」まで待たねばならない。しかし、成長途上にある植物を観察してみると、これから成長してくる葉や幼芽、ときには花までもがその頭頂にある成長点の部分にすでに萌芽として在るように、Goetheの「ものの見方」は、この前期ヴァイマル時代にすでに見られる。したがってここでは、自然研究における Goethe の根源的なものを見ようとする姿勢とそこに見られる「ものの見方」について述べるだけにしたい。

この時代の最も初期に属する Goethe の自然研究に関するものに、「Über Granit花崗岩について」がある。ここには Goethe がどのように自然に近づいたかがきわめて明瞭に窺える。すなわちこの小さな論文は題名どおり、花崗岩について述べているが、決して現実の現象を論じたものではない。一読すればすぐ理解できようが、これはいわゆる自然科学論文ではなく、詩である。現実の花崗岩を一つの観察対象として論じていない。Goethe はここではきわめて自然に近づいてはいるがまだ「想像力」の中にいる。そして彼が花崗岩を想像するのは、この石の持つ神秘に引かれるからである。というのは、この石はきわめて古く、あらゆるものの基盤である大地の根底を造ってきたし、現にいまも造っているように思われるからである（文中にもあるが、変わりやすい人間の心を対象とせず、最も変わらないもの、これはものの普遍性につながるが、こうしたものへ心が向かっていることが、Goethe の変化を表わしている）。

Goetheがこの小論の中で、

「In diesem Augenblicke, da die innern anziehenden und bewegenden Kräfte der Erde gleichsam unmittelbar auf mich wirken, da die Einflüsse des Himmels mich näher umschweben, werde ich zu höheren Betrachtungen der Natur hinaufgestimmt, und wie der Menscheng Geist alles belebt, so wird auch ein Gleichnis in mir rege, dessen Erhabenheit ich nicht widerstehen kann. So einsam, sage ich zu mir selber, indem ich diesen ganz nackten Gipfel hinabsehe und kaum in der Ferne am Fuße ein geringwachsenendes Moos erblicke, so einsam, sage ich, wird es dem Menschen zumute, der nur den ältesten, ersten, tiefsten Gefühlen der Wahrheit seine Seele eröffnen will. Ja, er kann zu sich sagen: Hier auf dem ältesten, ewigen Altare, der unmittelbar auf die Tiefe der Schöpfung gebaut ist, bring ich dem Wesen aller Wesen ein Opfer....大地の引きつけ動かす内なる力がいわば直接わたしに働きかけ、天の影響がわたしの身边にただようとき、わたしは自然のより高い観察へと強くいざなわれ、人間精神が万物に活気を与えるように、あらいがたい一つの比喻もわたしの胸に浮かぶだろう。わたしはこのむき出しの頂上を見下ろし、はるかふもとにわずかに広がる苔をかすかに眺めながら、真理の最古の最初の最深の感情にのみ心を開こうとする人は、なんと孤独だろう、とひとりごとを言う。そうだ、彼はこうひとりごとを言えるだろう — 創造の深淵の上にすえられた、このいとも古い永遠の祭壇の上で、わたしは全被造物の主にいけにえを捧げるのだ。」⁽⁸⁾

と述べる時、ひとはだれでも前述した Faust の「was die Welt im Innersten zusammenhält, 世界の奥底で世界を統べているもの」を知りたいかの認識欲と同じ調子を聞くであろう（もっとも Faust の激しさと対照的に、ここではきわめて深い、静かな全被造物の主（神）への畏敬の念が特徴的であるが）。Goethe は、自分がその上に座っている花崗岩が、彼の心の内奥に世界で最も深い、最も古い真理を告げてくれるように感じる。それゆえにこの花崗岩に想いを寄せるのである。ここに、彼の自然観察の基本姿勢がはっきり見られる。つまり自然現象そのものが問題なのではなく、その自然現象（ここでは花崗岩）を通して神的なものが啓示されるように感じるのが問題なのである。従って Faust や Werther と同じ姿勢なのである。Goethe は、この論文ではまだ「想像力」の世界に留まっていて、観察にはなっていない。しかし、それだけに若

き Goethe のものを見る基本姿勢を少しも変えずに自然観察へ進んだことがいっそうはっきり表れている。むしろ自然観察へ進んでも、彼の眼は現象そのものには留まっていない。ここに原初的に表現されているように、現象を通してその根底にあるもの (Goethe が神と呼んでいるもの) を見ようとしているのである。つまり Goethe は自然研究に於てもあくまでも Faust の *« was die Welt im Innersten zusammenhält, 世界の奥底で世界を統べているもの »* を知りたいと願う詩人なのである。「生きる神の衣」を「生きたままに」見ようとするのである。

従って詩人 Goethe が自然研究を始めた時、その方法においてきわめて大きな矛盾にぶつかったのも決して偶然ではない。この事情を最も端的に記しているのは、植物研究においてリンネの分類方法にぶつかった事情を語った「Der Verfasser teilt die Geschichte meiner botanischen Studien mit.」である (あとで光学研究に於ても Goethe はニュートンの方法とぶつかるが、このときも同じようなことが起こっている)。この中で、

「Soll ich nun über jene Zustände mit Bewußtsein deutlich werden, so denke man mich als einen gebornen Dichter, der seine Worte, seine Ausdrücke unmittelbar an den jedesmaligen Gegenständen zu bilden trachtet, um ihnen einigermaßen genugzutun. Ein solcher sollte nun eine fertige Terminologie ins Gedächtnis aufnehmen, eine gewisse Anzahl Wörter und Beiwörter bereit haben, damit er, wenn ihm irgendeine Gestalt vorkäme, eine geschickte Auswahl treffend, sie zu charakteristischer Bezeichnung anzuwenden und zu ordnen wisse. Dergleichen Behandlung erchien mir immer als eine Art von Mosaik, wo man einen fertigen Stift neben den andern setzt, um aus tausend Einzelheiten endlich den Schein eines Bildes hervorzubringen; und so war mir die Forderung in diesem Sinne gewissermaßen widerlich. さて当時の状態について、私の気持ちを意識してははっきり表現せよということならば、私が詩人に生まれついた人間であり、詩人というものは、自分の言葉、自分の表現を、直接そのつどそのつどの対象を見つけてくり上げ、それによってそれらの対象にくらかでも満足を与えようとするものだ、ということを考えていただきたい。ところが〔リンネのやり方では〕このような詩人ができ上がった術語をおぼえこまされ、いつもある数の単語とそれに添える単語を用意していて、なにかある姿が表われたら巧妙に選びあて、特色をよく表わす表示法のためにそれを利

用し、排列することができるようにしなければならないというのである。このような処理の仕方は私にはいつも、でき上がった石片をつぎつぎと並べ、幾千という個々のものから最後に絵のように見えるものをつくり出していく一種のモザイクのように思われた。そうして、このような意味の強要は私にはいくら不快感なことであった。⁽⁹⁾

とリンネの分類法を非難している。ここには、いわゆる現状の自然科学の方法と詩人の方法の違いがきわめて明瞭な形で表れている。即ちリンネの分類法は、現代自然科学の代表的な一方法と思われるのだが、その特徴は、いわば眼に見えないもの、抽象的なものを基準にして分類する。そしてもうひとつ、多くのものを分類するとき、なによりも「相違点」を大切にす。そしてその主眼がともかく分析することにあるのだ。こうして現象をいったん独立した個別的なものに分類し、そのうえでもう一度それらを再合成して現象の仕組を説明する。しかし、こうして再合成されたものが、詩人 Goethe の眼にはモザイクのように思われる。というのは、詩人 Goethe には、一度バラバラにしたものをいくらこのように再合成しても、やはりもとのあの神秘的なものを啓示する自然ではないように感じてしまうのである。⁽¹⁰⁾ 続けて同じ文の中で、

「Sah ich nun aber auch die Notwendigkeit dieses Verfahrens ein, welches dahin zweckte, sich durch Worte, nach allgemeiner Übereinkunft, über gewisse äußerliche Vorkommenheiten der Pflanzen zu verständigen, und alle schwer zu leistende und oft unsichre Pflanzenabbildungen entbehren zu können; so fand ich doch bei der versuchten genauen Anwendung die Hauptschwierigkeit in der Versatilität der Organe. Wenn ich an demselben Pflanzenstengel erst rundliche, dann eingekerbte, zuletzt beinahe gefiederte Blätter entdeckte, die sich alsdann wieder zusammenzogen, vereinfachten, zu Schüppchen wurden und zuletzt gar verschwanden, da verlor ich den Mut irgendwo einen Pfahl einzuschlagen, oder wohl gar eine Grenzlinie zu ziehen. ところで私は、植物のある外面的なできごとについて、みなで協定し、言葉を使って了解しあい、実行困難で不確実なことも多い植物模写などはいっさいなしですますことを目的とするこうしたやり方の必要性もよく理解できたけれど、さてこの方法を正確に適用しようとしてみると、器官の可変性 (Versatilität der Organe) という点にこの方法の主たる難点があることがわかったのである。同じ莖に、初めは丸く、やがてぎざぎざの刻みがいり、最後にはほとんど羽状の葉を発見し、それから

またそれが縮み、単純になり、鱗片りんぺんになって、最後にとうとうなくなってしま
うのを見たとき、私はどこかに杭くいを打って区切ろうかとか、まして境界線を引
こうなどという勇気を失ってしまった。⁽¹¹⁾

と Goethe は続ける。これは自然を生きたま見ようとする詩人 Goethe の眼
に映った感覚像が、分類という思考の人為的抽象作業を拒んでいることを言っ
ている。花卉や雄蕊の数といった、確かに頭の中ではなるほど明確な概念だが、
眼に見えない、人為的に定めた数を基礎とするリンネの分類法は、眼に見える
感覚を頼りとする詩人には、不快感をもよおすのである。前述したように同一
の植物さえ、下のほうに早く生えた葉と上のほうに生えた葉の形は、詩人の眼
にはゆるがせにできない違いに見えるのである。葉には可変性がある、これは
詩人の眼には動かしがたいものに見えるのに、数を基とした分類法は、こう
した点をすっかり捨象してしまい、ここに Goethe は違和感を覚えるのである。

しかしここで、一般的に分類という自然科学の分析と詩人の自然への近づき
かたの違いを考えてみよう。通常、自然科学で多くのものの中からどのように
幾つかのものに選り分けるのであろうか？それは「他と異なる点」によるので
はなからうか？従って通常は、分析者の眼が「他と異なる点」を探し求めよう
としても不思議ではない。だからリンネの分類法がこうして「数」に着目して
も別におかしくはないと誰もが思うのではなからうか？しかし、そう考える者
は、詩人の感覚像を基にしてものを見る見方と、例えば哲学者のように、ある
事物をひとつの概念に変え、それをレンガのように使って世界像を組み立てる
思弁的方法に眼を留めないものであろう。詩人というものは、そもそもどのよ
うに自分と異なったものへ近づこうとするのであろうか？それは分析とは全く
反対の方向ではないのだろうか？というのは、詩人は自分の心にか何かを感じる
こと（なにかの感動というべきなのだろうが）から始まる。つまり自分の心と
対象物との一致に始まる。心は、対象と、つまり相手と一体になろうとする。
ここでは従って「相違点」が探されるのではなく、逆に「一致点」を求めよう
とするのである。こうして詩人の心は相手の中に感情的に一体になろうとして、
自分と相手との「同一性」を求める。こういう意味で詩人にとって何よりも大
切なのは、人間の五感で、特に Goethe にとっては眼によって捉えられた感覚

像なのである。そしてこの感覚像はすっかり詩人の心に感じとられており、その中心は次のような同一感情によって貫かれている。即ち自分の心も生きている。相手も生きている。この生の根源にある同一感情が詩人と対象を結びつけているのである。もちろん詩人はどんなものにも結びつこうとするのではない。自己との同一性による。これが詩人の選択である。より純粋な、より真実なものへと捨象してゆく。より人間の心に適うものへ、人間性に相応しいものへと捨象してゆく。従って Goethe がこうして植物観察において分類の方向ではなく、相源同一性の方向へ、「原植物」の方へ進んでいったのも詩人性の賜物であろう。

ところで前述の引用文の最後にあった表現、「杭を打つ, einen Pfahl schlagen」や「境界線を引く, eine Grenzlinie ziehen」も Staiger も言っているように Goethe の自然観を端的に表すものである。つまりそもそも自然には一部を切り取ったり、境界線を引けるようなところはどこにもないというのが、Goethe の考えである。自然はどこまでもどこまでも続く無限である。だから区切れないし、切り取れない。「はてしない大自然よ、おまえはどこを捕えたらよいのか？」の世界である。全体あっての一であり、全体から切り取られた自然はもはや生きていない。どこまでも生きた自然を生きたまま見たいのである。Goethe の自然科学方法論とでもいうべき、イタリア旅行直後に書かれた「Der Versuch als Vermittler von Objekt und Subjekt」も純粋な観察のためにいかに人間の恣意が入らないようにすべきかに最大の重点が置かれている。これも前述した生きた力と力のぶつかりあう、万物の生成の場たる自然の中から一つの現象を純粋に取り出すことがいかに難しいかを、詩人 Goethe がよく知っていたからに他ならない。また分析が人間の恣意が入りやすいものと見ていたからである。

さて前期ヴァイマル時代の Goethe の「ものの見方」は、上で述べたように、自然への近づき方、そしてその自然の見方が若き Goethe の Faust の地霊の場で述べたものと基本的には少しも変化していない。ただし若き Goethe に於て、彼の天才的な想像力が自然を彼の心の内で直感的に孤独の中でとらえたのとは違って、前期ヴァイマル時代の Goethe に於てはもはや想像力だ

けではなく、彼の眼が、孤独の中でではなく、眼前にある自然を見る。しかしその眼線の行き先は変わっていない。彼は生きた自然が生き生きと現れてくるところに、Goetheの言葉では神が啓示されるところに、生が現象してくる根源を見ようとする。花崗岩を通して花崗岩ができてきた、古いその源が彼を引きつける。植物も絶え間なく、様々に自己形成しながら変化する。その変化そのものにGoetheの眼は注がれる。それゆえに葉の可変性は彼にはゆるがせにはできないのである。しかしこの期のGoetheはここまでである。その眼線はまだ自然の根底にまで届いていない。前述した通り、それはイタリアのシチリアでの「原植物の発見」まで待たねばならないのである。

5 イタリアに於けるGoetheの「ものの見方」について

5-1 イタリア旅行とGoetheの「ものの見方」との関連について

Goetheのイタリア紀行は、もともとイタリア古代遺跡や多くの美術作品について書かれた案内書ではないし、またイタリア旅行について書かれた旅行記でもない。この書は、本来彼の誕生からヴァイマル行きまでの生の発展を綴った自伝書「詩と真実」と同じように、彼の生を、彼の生の生成・発展を記述する自伝の一部なのである。それ故確かに古代遺跡巡りや美術品巡り等の記述もあり、またヴェネチア、ローマ、シチリアやナポリ等イタリアの名所・旧跡の訪問のあれこれや旅行記の体裁と見えないこともない記述があるけれど、それらはこの書の核心ではない。この書の核心は、あちこちに刻みこまれている彼の生の記述、特に心の記述にある。それ故本来ここでも、この書について述べるにあたっては、何故にこの旅（Goetheはこの旅行を死の跳躍〔salto mortale〕と呼んでいる¹²⁾）が企てられねばならなかったのかと言う旅の動機が語られねばならないだろう。例えば、十年という長きにわたった、絶え間ない現実への自己奉仕といってよいヴァイマル公国の行政の仕事が、彼の詩人としての心をいかに疲弊させたかとか、同じようにシュタイン夫人との恋も十年の長きにわたり、新しい発展的要素を失っていて停滞期に陥っていた等、彼の心の問題が問題になろう。しかしこのようにある時期の生活全般を問題にするのは、きわめて難しい問題である。Goethe自身もこの前期ヴァイマル時代につい

ては、「Der Verfasser teilt die Geschichte meiner botanischen Studien mit.」の中で、

「Der Kenner, der sich in das Jahr 1786 zurückzusetzen geneigt wäre, möchte sich wohl einen Begriff meines Zustandes ausbilden können, in welchem ich mich nun schon zehn Jahre befangen fühlte, ob es gleich selbst für den Psychologen eine Aufgabe bleiben würde, indem ja, bei dieser Darstellung, meine sämtlichen Obliegenheiten, Neigungen, Pflichten und Zerstreuungen mit aufzunehmen wären. 事情に精通した人で、1786年にさかのぼってみようとする人があれば、私がもう十年間も、動きがとれなくなったような気持ちでいた状態について、たぶんある概念をもつことができるだろう。もっともこの叙述にあたっては、私の職務、性癖、義務、娯楽をみないしにとりあげなければならないので、それは心理学者にとってもなかなか解決できない問題ではある⁽¹³⁾が。」

と一種の停滞期であることを認めているが、しかしまたこの時期の説明が難しいことも示唆している。こうしたことから、4でもそのように扱ったように、ここでもこの小論が Goethe の「ものの見方」を追うものであるので、こうした問題を述べるのは他日に期し、ここでも Goethe の「ものの見方」に関するもののみ焦点を絞りたい。

しかし、ただこの問題では、イタリア旅行への動機に関する私の考えとこのイタリア旅行の動機の根底には、Goethe の「ものの見方」の問題があるということだけを述べておきたい。即ち Goethe は、上の引用文の直前でイタリア旅行の動機とは直接何の関係も関係づけていないが、植物というものは、絶えず新しい成長のために、機会を求めていること、新しい成長条件を求めていることに気づかされたことを記しているが、この言葉のように、筆者には、作家 Goethe が、こうした停滞を打ち破るためにイタリアへ脱出したように思われるのである。というのは、十年に及ぶ前期ヴァイマル時代の Goethe は、行政官として見た場合は十分な仕事をしたかもしれない。しかし詩人としての仕事は、この時期はいかにも少ないことは明らかである。Goethe 自身も、イタリア旅行出立の一年前に彼の著作集を出す話がでたとき、このことに気づかされたにちがいない。イタリア紀行の言葉でいえば、ブレンナー峠を越え、初めてイタリアへ足を踏み入れた9月11日トレントで、

「Mir ist jetzt nur um die sinnlichen Eindrücke zu tun, die kein Buch, kein Bild gibt. Die Sache ist, daß ich wieder Interesse an der Welt nehme, meinen Beobachtungsgeist versuche und prüfe, wie weit es mit meinen Wissenschaften und Kenntnissen geht, ob mein Auge licht, rein und hell ist, wie viel ich in der Geschwindigkeit fassen kann, und ob die Falten, die sich in mein Gemüt geschlagen und gedrückt haben, wieder auszutilgen sind. しかし現在のぼくには、書物も絵画も与えてくれない、なまのままの印象が大切なのだ。肝心なことは、ぼくがふたたび世の中のことに関心を抱き、自分の観察力をためし、そして自分の学問や知識がどの程度のものか、自分の眼が明澄で冴えているか否か、どれくらいのことを自分は敏速につかみうるか、ぼくの心情に刻みこまれている⁽¹⁴⁾ひだはもどどうりに消し去ることができるかどうか、を吟味することだ。」

と書いているように、彼の詩心が発展可能性を奪われて、成長停滞を起こしていたことを述べている。植物が本能的に自分の成長空間を求めるように、Goetheの詩心がまさしく本能的に新しい生活空間としてイタリアの地を求めたのだというように思われるのである。ところで、こうした停滞の問題には、その根底に「ものの見方」がある。それは習慣化してしまった生活の変化しようもない枠と切っても切れない関係にあることは言うまでもないが、「ものの見方」を改めるという意味で、「ものの見方」と深い関係がある。従って先ずイタリア紀行のローマ入りまでを中心に考えながら、こうしたGoetheの「ものの見方」の根底にある問題を考えてみたい。

5-2 イタリアに於けるGoetheの「ものの見方」の根底にあるもの

さて、イタリア紀行を読もうとするものは、まずこの書の内容が実に多種多様なことに驚くにちがいない。天候、地形、地層、岩石、その土地その土地の彼の眼に入った建物や施設、風景、美しい月光のもとでの山岳風景やローマの古代遺跡の光景、植物やその育成環境、人々の服装、話ぶり、円形劇場や裁判所、裁判傍聴、高等法院や海軍工廠、公開演説、海や海浜の生物、ヴェスヴィオ火山の三度の登山、航海やその時の遭難騒ぎ、その土地その土地の名所・旧跡巡り、ヴェネチアの舟や舟歌、大学や植物園訪問、さまざまな逸話、特にミラノ娘との恋、おびただしいローマの名画鑑賞、写生、塑像研究や人体研究、自然界、芸術界、イタリア人と彼らの生活圏など、実にありとあらゆることがイ

タリア紀行の内容を形作っている。そして、その合間合間に彼の心の状態や感想や考察がはめこまれている。いったい、どこにこの書の中心があるのかとすら思われかねない。しかしこのようにイタリア紀行の内容をなす対象は、実に多種多様であるけれど、一つだけ明確に述べられることがある。それは、Goethe はイタリア旅行の間、ほとんど「観察」に身を捧げているということである。1786年9月3日の早朝、従僕ザイゼル以外の誰にも行先を告げず、Möller という変名すら用意してまで身を隠しての秘密の旅立ちであったが、その直後からあわただしい旅の中の寸暇を拾うようにして、わずかの時間を旅の記録に利用して、ヴァイマールとの唯一の心の絆であったシュタイン夫人のために旅日記(後でこれをもとにしてローマまでのイタリア紀行の部分を書く)を書き続ける。このほとんどは観察である。これはローマまで続く。ローマでも時間を空費させる社交を避け(名前を隠していた。もちろん友人たちは Goethe であることを知っていた)、ほとんどドイツ人ばかりの画家仲間の中に身を置き、ローマの絵画鑑賞やスケッチに身を捧げている。これもまた「観察」である。ただイタリア旅行の間、地元の人々との社交の場に入り、いくらか生活を享受するのは1787年2月22日から6月6日迄の、ナポリーシチリアーナポリと続く南イタリアの旅の間だけである。もちろんこの期間でも「観察」が続いていることは、イタリア紀行が示している。第二次ローマ滞在の期間も、観察したものの一層深い理解のための、スケッチ、模写、彫像の実習、人体研究など、観察の段階がずっと高度なものに高められているが、やはり「観察」が生活の中心であった。このようにイタリア紀行はこれら実に驚くべき熱心さと勤勉さで続けられた「観察」の記録であるといつてよい。

ところで一体どうして Goethe はこんなに熱心にまた勤勉にものを見なければならなかったのか? 歴史的な知識が彼をイタリアに誘ったのだろうか? あるいは憧憬の地イタリアの自然や芸術が彼をもの珍しがらせたのであろうか? 否そうではない。イタリアは実は彼がイタリアに来るまえによく知っていた。彼の父の人生最大の自慢はイタリア旅行であった。Goethe は幼い頃からこの父の自慢話を聞いて育った。またフランクフルトの生家の玄関には父がイタリアから持って帰ったヴェネチアのゴンドラの模型やイタリアの地図が飾られてい

た。Goethe はこれを見て育った。またこの時以前に二回ほどイタリアへ行こうとした。一度はリリーとの思いに耐えかねて、スイス旅行の途上ブレンナー峠に立った。もう一度はヴァイマルへの招聘の使いが遅れて、彼がヴァイマル行きを諦めかけた時である。こうしたことがあったイタリアであるので、イタリアは Goethe にとって小さい時からの憧憬の地であると同時に親しい国であった。また歴史趣味がイタリアへ行かせたのではない。それはイタリア紀行の次のような記述がよく示している。10月12日付けの記述に

「Hätte ich nicht den Entschluß gefaßt, den ich jetzt ausführe, so wär' ich rein zugrunde gegangen: zu einer solchen Reife war die Begierde, diese Gegenstände mit Augen zu sehen, in meinem Gemüt gestiegen. Die historische Kenntnis förderte mich nicht, die Dinge standen nur eine Hand breit von mir ab; aber durch eine undurchdringliche Mauer geschieden. Es ist mir wirklich auch jetzt nicht etwa zumute, als wenn ich die Sachen zum erstenmal sähe, sondern als ob ich sie wiedersähe. いま実行に移している決心を、もしあのとき抱かなかつたらば、ぼくはまったく破滅していたことであろう。この国の風物をこの眼でもって見たいという欲望は、ぼくの心のなかでそれほどまでに成熟していたのだった。歴史上の知識がぼくをうながしたわけではない。それらの事物はぼくから手の幅しか離れていなかったのだが、それは突き破りえない障壁によって隔てられていた。ほんとうにぼくはいま、こうした事物を初めて見る気はしない¹⁶⁾で、再会の思いがしている。」

とか、11月1日のローマ到着後の第一目の手紙に、

「... Ja, die letzten Jahre wurde es eine Art von Krankheit, von der mich nur der Anblick und die Gegenwart heilen konnte. Jetzt darf ich es gestehen; zuletzt durft' ich kein lateinisch Buch mehr ansehen, keine Zeichnung einer italienischen Gegend. Die Begierde, dieses Land zu sehen, war überreif:... そうだ、この数年間それは一種の病気のようなものとなり、それを癒すことのできるのは、この地を実際に眺め、この地に身をおくということだけであった。いまこそ白状もできるのだが、ついには一冊のラテン語の書も、一枚のイタリアの風景画さえも、もはやこれを眺めるに堪えなくなった。この国を見たいという欲望は、成熟の度を越していた。¹⁶⁾」

と書かれている通りである。上述のように Goethe は「wiedersähe, 再会する」

という動詞を使っている。彼はイタリアを非常によく知っていたのである。しかしそれは、他人の話や絵画や銅版画やスケッチなどを通して、彼の想像力によって知っていたに過ぎない。「mit Augen, 自分の眼で」見たのではなかった。従って、想像力でとらえた像と実物を自分の眼で見た像とは「nur eine Hand breit von mir ab 手の幅も離れていない」ほど似ていたが、しかしその幅は「undurchdringliche Mauer 突き破りえない障壁」であったのである。これは対象も問題ではあったろうが、それ以上に「ものの見方」が問題であったのである。ここには若き Goethe に見られた「ものの見方」とはまったく違う「ものの見方」がある。若き Goethe に於ては、<完全な孤独の中での想像力の遊びもしくは高まり>が、彼の制作方法であり、また「ものの見方」であった。これは、想像力の中でこんこんと一つの世界が作り出されてゆくという、ほとんど天才的な方法であった。外的自然は、それ故ここには直接的には入ってこれなかった。一度想像力というフィルターを通してきたものであった。しかしここイタリアでは Goethe の眼に向かって対象物が来る。心はただおのが心を広げているだけである。これを一番よく表しているのは、1786年12月20日付けのシュタイン夫人への手紙の中で、

「Ich lasse mir nur alles entgegen kommen und zwingen mich nicht dies oder jenes in dem Gegenstande zu finden. Wie ich die Natur betrachte, betrachte ich nun die Kunst, ich gewinne, wornach ich solange gestrebt, auch einen vollständigen Begriff von dem Höchsten was Menschen gemacht haben, und meine Seele bildet sich auch von dieser Seite mehr aus und sieht in ein freieres Feld. ぼくはすべてがむこうからやってくるのにまかせ、無理に対象のなかにあれこれを見つけ出そうなどとはしない。自然を観照したのと同じ態度で芸術を観照している。久しくぼくが努力してきたことだが、こうして人間がつくりあげた最高の作品についてのみ完全な観念をもちたいと思っている。ぼくの心はこの面からも鍛えられ、もっと自由な世界が開かれるだろうと思う。」

と観察姿勢を述べている。ここで心の、というかむしろ想像力のといったほうがよいのだろうが、想像力の恣意性を強く戒めている言葉は、例えば若き Goethe の「ものの見方」となんと違うことだろうか？若き Goethe では自我の独自性が強調され、それ故「若き Werther の悩み」で見たように想像力の恣意性

が、よくいえば主観性が強く表れたのである。しかしここイタリアでは、その流れの方向が全く逆になって、外なる自然が Goethe の心の中に眼を通して流れ込んでくるのである。そしてこのことに Goethe は歓喜の声をあげているのである。例えば、1786年11月10日の Herder 夫妻にあてた手紙には、

「meine Übung alle Dinge wie sie sind zu sehen und zu lesen, meine Treue das Auge Licht sein zu lassen, meine völlige Entäußerung von aller Präntention, machen mich hier höchst im stillen glücklich. Alle Tage ein neuer merkwürdiger Gegenstand, täglich neue, große, seltsame Bilder und ein Ganzes, das man sich lange denkt und träumt, nie mit der Einbildungskraft erreicht. すべてのものをあるがままに見、読みとろうとする修練、わが目を光たらしめようという衷心の願い、あらゆる僭越の完全な断念、これらは当地にあってひそかにぼくをこのうえなく幸福にする。日々新しい注目すべき対象が現われる。偉大な珍しい形象に日ごと新たにぶつかる。それらすべては久しく思いをひそめ夢に思い描いていたものだが、想像力をもってしてはついに到達できないものなのだ。⁽¹⁸⁾」

とあり、まさしくこの言葉こそイタリア旅行の目的を最も端的に語っているが、この言葉は北国ドイツでの「ものの見方」と南での「ものの見方」の違いを言っている。「meine völlige Entäußerung von aller Präntention」とは、ものを「あるがままに見る」ということなのだ。そしてその逆に「想像力で見る」ことの中には「Präntention, 僭越」が入ってしまうことなのだ。これでは真実のものの姿は見えてこない。1786年11月7日のシュタイン夫人への手紙に、

「Wenn du mit deinem Auge und mit der Freude an Künsten, die Gegenstände hier sehn solltest, du würdest die größte Freude haben, denn man denkt sich denn doch mit aller erhöhenden und verschönernden Imagination das Wahre nicht. 芸術を楽しむ心をもって自分の目で当地のさまざまなものを見るなら、君はこのうえない喜びを覚えるだろう。というのも、どんなに高揚し美化するイメージ力をもってしても、頭のなかでは真実をつかむことはできないからだ。⁽¹⁹⁾」

と述べられている通りである。

ところでこうしてここイタリアでの Goethe のものを見る姿勢はわかったとしても、では一体何を見ようとしているのだろうか？言葉を変えて、上の引用

文の表現で言えば、Goethe はものの真実のあり方を見ようとしていると言えるのであろうが、では一体ものの真実のあり方とはどのようなあり方を言うのであろうか？そして若き Goethe においてはそのようなもののあり方は見えなかったのだろうか？

もちろん、このように「すべてのものをあるがままに見、読みとろう」とか、「ぼくはすべてが向こうからやってくるのにまかせ、無理に対象の中にあれこれを見つけ出そうなどとはしない」とかいうものを見る姿勢とは言っても、これは心が何もしない、ただただ眼を通して流れ込むがままにするというのではない。つまり主観というものが消えることではない。例えば、9月27日付けのバードヴァの記述の中に、

「... und was ist Beschauen ohne Denken? 思考をとまわぬ観照などは何の意味があるか？」⁸⁰⁾

と言っているように、心のほうが全くの白紙ということではない。後に詳しく述べるだろうが、Goethe は観察をしたら、ほとんどほっておかない。むしろ必ずと言ってよいほど思想へ高めようと努める。従って、上で引用した文にある「ものの見方」は、あくまでも若き Goethe の「ものの見方」との対照での違いを述べているのである。心のなかだけで想像力が描いた像と、眼を通した、事物そのものがその本質を心の中に刻みこんだ像とは、その真实性に於て全く違うことを述べているのである。どうしても想像力は、若き Goethe の芸術観にあったように、自分の精神をその像の中に吹き込んでしまい、恣意性を持ってしまうのである。

5-3 イタリアに於ける Goethe の基本的な「ものの見方」とその特徴

さてそれでは、どんな「ものの見方」が、イタリア旅行の初めにあったのかという、その基本的なものを見る姿勢は、再び引用するが、トレントでの記述(9月11日)に、

「Mir ist jetzt nur um die sinnlichen Eindrücke zu tun, die kein Buch, kein Bild gibt. Die Sache ist, daß ich wieder Interesse an der Welt nehme, meinen Beobachtungsgeist versuche und prüfe, wie weit

es mit meinen Wissenschaften und Kenntnissen geht, ob mein Auge licht, rein und hell ist, wie viel ich in der Geschwindigkeit fassen kann, und ob die Falten, die sich in mein Gemüt geschlagen und gedrückt haben, wieder auszutilgen sind. しかし現在のぼくには、書物も絵画も与えてくれない、なまのまの印象が大切なのだ。肝心なことは、ぼくがふたび世の中のことに関心を抱き、自分の観察力をためし、そして自分の学問や知識がどの程度のものか、自分の眼が明澄で冴えているか否か、どれくらいのことを自分は敏速につかみうるか、ぼくの心情に刻みこまれているひだはもとどおり消し去ることができるかどうか、を吟味することだ。⁸¹⁾

と書かれているように、若き Goethe からの「ものの見方」や、前期ヴァイマル時代の自然研究の中で培った学問や知識がすでにあるのである。もはや初心者ではないのである。ただここイタリアに入ってからには、前にも引用したが、Staiger が言ったように、北方人の心で、つまり心を高揚せんがために想像力で、ものを見ないという態度がはっきりと意識されている違いがあるが。

それでは一体どのような「ものの見方」がイタリア旅行の始めにあるのか？それはどのようなものか？またどのようにそれは深化・発展しているのか？

まず前期ヴァイマル時代に培われた Goethe の「自分の学問や知識」であるが、これはほぼ当時 *naturalis historia* (博物学) といわれた動物学、植物学、鉱物学の分野である。動物学では、特に「顎間骨の発見」⁸²⁾ で有名だが、骨学が Goethe の関心をひいていた。植物学では、ヴァイマル公国のチューリングゲンの森の管理の関係から始まり、イエーナ大学で薬用植物がさかんに栽培されていたことなどで関心が深められた事情が詳しく書かれている「Der Verfasser teilt die Geschichte meiner botanischen Studien mit.」にもあるが、特にイタリア旅行直前にリンネに没頭していたことが、手紙などに残っている。そして鉱物学に関しては時期的には最も早い時期に始められたのだが、イルメナウ鉱山の機縁から続いていた。こうした「自分の学問や知識」は、イタリア紀行でも続けられている。即ち鉱物学では、出発直後から、道路や地形の観察とその考察が続けられ、例えばドナウ河の大昔からの地形の形成に思いを馳せている。また、アルプスの地形や地質が観察されており、岩石の収集癖のあった Goethe は見本を持ってゆくことを諦めねばならないことを残念がっ

だが、結局収集欲に負けて途中で収集を始めている。またローマでは彫刻の材料の大理石のこと、ナポリでは命がけで三度もヴェスヴィオ火山へ登っており、シチリア島に於ても岩石や地質の考察・観察が続いている。つまり Goethe はこのイタリア旅行ではほぼ自分が旅行した全地域の地質・地形の形成について当時としては十分な知識が得られたように思われる。それほど一貫してこの分野の観察・考察がなされている。次に植物学に関して述べれば、これもイタリア紀行のなかを一本の赤い糸のように貫いているテーマであり、美術・芸術の観察の次に大きなイタリア紀行のテーマであると思われる。具体的には、アルプスでは、リンドウや楓などの観察や地形、特に高い土地と植物の形態との関係に眼を留めている。またイタリアへ入ると北国ドイツと違った様々な植物の種類や成育の様相に眼を留めている。これは南イタリアのナポリやシチリアでは、丁度植物の最も成育の盛んな春の時期に重なったこともあって、Goethe の植物観察はその頂点である「原植物の発見」に至っている。また再び帰ってからも、美術・芸術の観察にきわめて忙しかったにもかかわらず、植物を双葉から育てたりしており、「原植物」の考えを当時ローマに滞在していたモーリッツに講述したりしている。最後に動物学であるが、これはさすがに骨に関する記述はイタリア紀行に見えない。しかし Goethe の学問・知識は、それぞれが分離し、独立したものではなく、逆に相互に関連しあっていたのだが、第二次ローマ滞在において、Goethe が人体の塑像の練習に夢中になったが、これは人間の骨ときわめて深い関連があったと考えてよいであろう。

さてイタリア旅行の始めにあった Goethe の「自分の学問・知識」についておおまかに見てきたが、以上のように Goethe の前期ヴァイマル時代に培われた学問・知識は、イタリアにおいてほぼすべてが続けられている。むしろその全部が動員されたといってよい。そしてますます発展させられている。

ところで彼の「ものの見方」がイタリア旅行においてどのように深化・発展したかを述べる前に、まずその最初の「ものの見方」がどんなものであったかを見ておこう。

さてその「ものの見方」というのは、結論的に述べると、あらゆるものを「形成 Bildung」と見る見方である。もともと Goethe は、このような見方を受け

入れる見方をしていた。既に若き Goethe では、芸術の根底に造形力を見ていた。あるいは、Werther が大自然の壮麗な景色を見たとき、世界を創造する創造者の息吹を感じた。彼は、あとでこの同じものに破壊者をも見なければならなかったが、こうした表現には、Goethe が自然の奥底に生命を破壊する力とともに、また創造する力を見ていたことを示している。前期ヴァイマル時代の花崗岩にも Goethe はそうした力を感じていた。そしてこの力は、芸術の分野では造形力であると捉えていた。こうした見方から個々のものに「形成 Bildung」を見るのは、そう遠くはない。もちろん Goethe は、イタリア旅行の始めに明確な意識的なこうした形成的な「ものの見方」があったわけではない。しかしイタリア紀行を読んでゆくと、ある特徴ある「ものの見方」に気がつかざるをえない。それが上で言ったような、あらゆるものを「形成 Bildung」と見る見方である。その具体例をあげてみよう。それは後でも述べるがきわめてあちらこちらにあり、というよりほとんどの事物なり現象の説明には見られるのだが、その最も明白な例として、ヴェローナの円形劇場の説明の記述を挙げてみよう。

「Wenn irgend etwas Schauwürdiges auf flacher Erde vorgeht und alles zuläuft, suchen die Hintersten auf alle mögliche Weise sich über die Vordersten zu erheben: man tritt auf Bänke, rollt Fässer herbei, fährt mit Wagen heran, legt Bretter hinüber und herüber, besetzt einen benachbarten Hügel, und es bildet sich in der Geschwindigkeit ein Krater.

Kommt das Schauspiel öfter auf derselben Stelle vor, so baut man leichte Gerüste für die, so bezahlen können, und die übrige Masse behilft sich, wie sie mag. Dieses allgemeine Bedürfnis zu befriedigen, ist hier die Aufgabe des Architekten. Er bereitet einen solchen Krater durch Kunst, so einfach als nur möglich, damit dessen Zierat das Volk selbst werde. Wenn es sich so beisammen sah, mußte es über sich selbst erstaunen; denn da es sonst nur gewohnt, sich durcheinander laufen zu sehen, sich in einem Gewühle ohne Ordnung und sonderliche Zucht zu finden, so sieht das vielköpfige, vielsinnige, schwankende, hin und her irrende Tier sich zu einem edlen Körper vereinigt, zu einer Einheit bestimmt, in einer Masse verbunden und befestigt, als e i n e Gestalt, von e i n e m Geiste belebt. 平らな地面の上で何か見物に値すること

が起こってみなが集まってくると、いちばん後方にいる連中はありとあらゆる方法で最前列の連中より高くなろうとする。ベンチに乗ったり、樽をころがしてきたり、馬車で乗りつけたり、板をあちこちに架けたり、近くの岡を占領したりして、たちまちのうちに噴火口のような形になる。

見世物がたびたび同じ場所で行われると、料金を払える人びとのためには簡単な栈敷が設けられ、あとの群衆は好き勝手に手段を考え出す。このような一般的要求を満足させるのが、ここでは建築家の使命なのだ。建築家はこのような噴火口式のものを人工的に造りあげる。それもできるかぎり簡素に、民衆自身がその装飾となるようなくあいにする。民衆がそのようにして集まった自らを眺めるとき、彼らは自らにたいして驚嘆せずにはいられなかった。それは彼らも、いつもは自分たちが右往左往し、秩序もそして特別の規律もなしに雑然としているのを見慣れているのに、この頭数^{あたまかず}も多ければ心も各自ばらばらであちこちと行き迷う動物が、合して一つの高貴な身体となり、一つの統一体にまで定められ、一つの集団にまで結ばれ固められ、一つの精神に生きる一つの形姿となった自らを認めるからである・・・²³⁾

これが Goethe の見た古代遺跡の円形劇場である。ここには、おそらく見物人もいない、ガランとしていたであろう円形劇場をこうした生きた一つの生成、一つの「形成 Bildung」と見る眼がある。事物の発生を見る眼がある。

ところでこうした特徴ある「ものの見方」は、何もこの円形劇場の記述だけではない。先にも言ったが、多くの記述を見るとこの見方が裏書できよう。例えばイタリア紀行の冒頭近くに、

「... Den Regenfluß herauf hatte in uralten Zeiten Ebbe und Flut aus dem Donautal in alle die Täler gewirkt, die gegenwärtig ihre Wasser dorthin ergießen, und so sind diese natürlichen Polder entstanden, worauf der Ackerbau gegründet ist. Diese Bemerkung gilt in der Nachbarschaft aller größern und kleinern Flüsse, und mit diesem Leitfaden kann der Beobachter einen schnellen Aufschluß über jeden der Kultur geeigneten Boden erlangen. 太古の時代に、潮の干満がドナウの溪谷からレーゲン河をさかのぼりあらゆる谷間に作用したのだが、現在その水がここの土地に注がれ、こうしてそこに天然の埋立地ができ、そのうえに耕地が作られたわけだ。ここで述べたことは大小あらゆる河川の付近にあてはまる事実であって、これを手がかりにして観察者は、耕地に適するあらゆる土壌についてすみやかにその由来を解明することができる。²⁴⁾

とあるが、これは Goethe がレーゲンスブルクまでの地形・土質などの観察に

もとづいてこのように自分の考えをまとめたのである。この記述の中にも、彼がどのようにドナウ河の潮の干満を中心としてこの地方の地形が形成されたかを考えた「形成 Bildung」の「ものの見方」がある。その外、このようにイタリア紀行はその冒頭から例を挙げる暇もないくらい、こうした事物の観察に啓発されて、形成をもととした考察・説明が続く。イエズス会のやり方にも、彼らの考え方がどのように現実化されているか、つまりその核である彼らの精神がどのような外観を示しているか、という点に Goethe の観察は集中している。その外、ブレンナー峠では「eine Grilleある気まぐれな思い付き」と断りながら、アルプスのような高山の珍しい天候現象の原因を死んだものと考えられている山々の内部の中から発生してくる、脈動する力のせいではあるまいかと想像するのである。もちろんこれは、Goethe は本気に考えていないが、こうした考えにすら形成の考えが見られる。つまり事物の内奥に内在する力があり、その発展したものが眼の前の現象であるという形成の考えが見られる。その外、人間の外見を観察して、その地方の食物のせいであるとする栄養に関する記述とか、その外例えたとでも小さなことにもこうした考え方の特徴が見られる。ヴェローナで Goethe は、市内の中流階級の歩きかたが眼に付く。彼らは歩くとき、両腕を振る。しかし上流階級の人、片腕だけ振る。そしてこれを剣を付ける習慣と結びつける。この観察も、どのようにして片腕だけ振るようになったのかという、考察があつたことを示している。その外、ヴェネチアの舟歌を聞いて、その起源を考えずにはおれない。すなわち始めは、沖に出た漁師の夫と浜に残った妻の会話から発展したのだと考えてやっとなおち着くのである。同じく、ヴェネチアでは、この不思議な多くの島から成り立った町の成り立ち、即ち敵に追われてやむなくここに逃げ込み、ビーバーの島のように無数の島々に住まねばならなくなった経緯、その狭い地域での都市の発展に伴う道路や運河の発達の関係、また有名なラグーネを見て Goethe は、この瀉がいずれ隆起していつて無くなってしまふことなどを思わずにはいられない。

このように特にローマ入りまでの期間の記述には、枚挙に暇がないほど、その観察の考察・説明には、ものを「形成 Bildung」と見る特徴が顕著である。

ここでこの「ものの見方」の特徴をまとめて言ってみると、次のように言えるであろう。

まず若き Goethe 以来, Goethe の眼線は常にももの根源に注がれてきた。そして事物の本質を直観する力は、尋常ではなかった。例えばシュトラスブルクの大聖堂を見たとき, Goethe は人に教えられずに計画には在ったが, 建築されなかった部分があるのを見ぬいた。これは如何に Goethe の直観が, 事物の深みに届くかを示している。そして Goethe はこうした事物の根底に, 例えば花崗岩に対してのように神の啓示を感じてきていた。こうした事物の内奥へ向かう眼線が最も大きな特徴であるといえよう。したがって Goethe は, 事物を静止したものとして捉えない。生成してくるものとして捉えようとする。こうして後でも述べるが, 植物も変態として捉える基盤がここに認められるのである。

次に Goethe はきわめて熱心に観察をするが, 当然それはその事物の外形を見んがためではない。外形を凝視するのは, 内なるものを見んがためである。後年 Goethe は, 「Zur Morphologie 形態学のために」の中の「Die Absicht eingeleitet」の中で, 生命ある存在を分解し続けて, あとでその要素を集めても元の生きた生命にはならないことを述べたあとで,

「Es hat sich daher auch in dem wissenschaftlichen Menschen zu allen Zeiten ein Trieb hervorgetan, die lebendigen Bildungen als solche zu erkennen, ihre äußern sichtbaren, greiflichen Teile im Zusammenhange zu erfassen, sie als Andeutungen des Innern aufzunehmen und so das Ganze in der Anschauung gewissermaßen zu beherrschen. だからこそ学者たちもまた, いつの時代にあっても抑えがたい衝動を感じてきたのである。それは, 生命ある形成物そのものがあるがままに認識し, 眼にみえ手で触られるその外なる部分部分を不可分のまとまりとして把握し, この外なる諸部分アンネクソングを内なるものの暗示として受けとめ, こうしてその全体を幾分なりと直観においてわがものとしよう, という衝動である。」²⁵⁾

と述べているが, 事物の外形の「ものの見方」の特徴がここにある。即ち外形は内なるもの(神)を暗示してくれるものなのである。そして内なるものは絶え間ない造形力なので, 外形は固定的なものではなく, 変化するものである。

さて最後に考え方であるが、Goetheは根源へ根源へと遡る考え方をする。これは上で言ったことを考えればよく理解されよう。つまり外形を頼りに、より内部へより内部へと、より根源へより根源へと遡ってゆくのである。事物の内奥の生命を少しでも明白に認識せんがために。もちろんこれが、Goethe文学の根底にある Faust のかの認識欲と深い関連があることは言うまでもない。これもまた後年だが、Goetheは、「Bildungstrieb 形成衝動」(1820)の中で、

「Betrachten wir das alles genauer, so hätten wir es kürzer, bequemer und vielleicht gründlicher, wenn wir eingestünden, daß wir, um das Vorhandene zu betrachten, eine vorhergegangene Tätigkeit zugeben müssen und daß, wenn wir uns eine Tätigkeit denken wollen, wir derselben ein schicklich Element unterlegen, worauf sie wirken konnte, und daß wir zuletzt diese Tätigkeit mit dieser Unterlage als immerfort zusammen bestehend und ewig gleichzeitig vorhanden denken müssen. Dieses Ungeheure personifiziert tritt uns als ein Gott entgegen, als Schöpfer und Erhalter, welchen anzubeten, zu verehren und zu preisen wir auf alle Weise aufgefordert sind. これらすべてをより精密に考察するならば、次のことを容認するほうが簡単明瞭かつおそらく徹底的ということになるであろう。すなわちわれわれは、現にあるものを考察するためには先行した活動を認めなければならず、またある活動を考えようとするならば、その活動の根底に作用のおよぶことのできた適当な要素があるとみなす。そして最後にわれわれは、この活動がこの根底要素とつねに共存し永遠に同時に存在していると考えざるをえない。

この途方もないものが人格化されると、われわれには神、創造者、維持者として現われてくるのであり、この神を崇拜し敬愛し賛美するよう、われわれはあらゆる仕方で促されているのである。⁽⁶⁾」

と述べているが、こうした考え方を通して、事物の根底を、事物の発生してくるところを、生命の生まれてくるところを見ようとする「ものの見方」が生まれてくるのである。

さてここで Goethe の「ものの見方」の特徴をまとめてみると、(1)眼線が生命の発生してくるところに向けられていること、またそれは造形力である。(2)ものの外形は、内なるものを見んがためであり、内なるものの暗示と見ていること、また外形は絶え間ない形成 (Bildung) である。(3)外形を頼りにものの根源へ根源へと遡る見方、考え方を取ることの三点にまとめられよう。しかし

Goethe が事物の説明・観察の記述に於ては、上の(3)は逆の形を取ることを言っておきたい。というのは Goethe は、説明に於ては事物の外形の発展の仕方に従う。例えば植物の観察に於ては、彼の思想を記述するにあたって、植物が示すとおりに記述せざるをえなかった旨を述べているが、そのように記述は現象が展開する順に従うので、結局時間的な順を取る。それゆえ記述は、Goethe が後で「genetisch 発生的」と呼ぶ特徴を持つ。したがってイタリア紀行の記述には、上で述べた特徴は何よりも先ず発生を問題にしている特徴となって出てくる。例えば円形劇場の成立の考えやヴェネチアの成立の記述のように。

さてところでこういった特徴ある「ものの見方」は、先にも言ったが、イタリア紀行の中の事物の説明や観察の記述に必ずと言ってよいほどしばしば見られるものであるが、しかしその在り方は、決して一様に在るのではない。ローマ入りまでの記述にことに顕著に見られるが、それとて一様ではない。個別的である。例えば、先に述べた例で言えば、円形劇場やヴェネチアの都市の発生を想像する記述等には、きわめて明瞭に窺えるが、お互いには何の関係もない。一つ一つの事象に、その時その時の事情に応じて説明なり、観察なりを Goethe はする。ただそこに共通する見方が窺えるという意味で述べているのである。またイタリア紀行を通覧した場合、この「ものの見方」は発展・深化していると言えるが、これとて一様ではない。個々の観察によって異なっている。ただ一貫した一つの連続の観察の対象としては、特に植物観察と美術・芸術品の観察が挙げられるが、ここにははっきりとこの「ものの見方」は発展・深化が見られる。植物観察に於ては後で詳述するが、きわめて多くの植物やまたさまざまな様子の観察を通して、根源的なものに、あらゆる植物の根底に Goethe が自分の眼で見たと信じた根源的なものに眼線が届いた。美術・芸術品に於ては、数々のイタリアの美術・芸術品の根源的な形が Goethe の眼底に刻印され、こうした像 (Bild) がドイツへ帰った後の Goethe にどれほど文学の指針を与えたかは、彼のライフワークとなったファウスト第二部が示しているが、その外にも人間の芸術活動の根源にも彼が植物観察で見たのと同じものを見た。これも後で詳述するが、さてイタリア紀行の第二次ローマ滞在記を読んでいると、彼が始めの頃、ここまで述べてきたように個々のものに見た「形成 Bildung」

をすべてに見ている。「mein Prinzip 私の原理」とか「Kapitalschlüssel マスターキー」という表現²⁹⁾に見られるように、植物の「形成 Bildung」に見たものを、この美術・芸術品にも見るようになり、始めバラバラに見ていたものをすべてのものに見るようになってゆく。ここに Goethe の「ものの見方」の発展・深化が見られるように思われる。それゆえに、この二つの「一貫した一つの連続した観察」の対象たる植物と美術・芸術品に於て、「ものの見方」の発展・深化を見てみよう。

5-4 植物観察に於ける「ものの見方」について

さて、こうした「ものの見方」は、今例に挙げたように実に様々な物の観察に見られる特徴であるが、当然イタリア旅行の最大の眼目であった美術・芸術品の観察にもあてはまる。またこうした美術・芸術品の次に大きな成果が在ったとってよい植物の観察にも見られる。まず植物観察の記述に於ける Goethe の「ものの見方」を見てみよう。

Goethe の残っている手紙によると、Goethe は、イタリア旅行へ出発する前から植物に異常とってよいほど関心を寄せていた。例えば 7 月 9 日のシュタイン夫人への手紙などを読むと植物の形態になみなみならぬ関心を寄せ、以前から観察を続けていたことがわかる。従って、イタリア紀行の中に消えては現れ、現れては消えるように続く、植物の観察記述は、こうした前期ヴァイマル時代からの続きなのである。また、先に引用したトレントでの記述にあった、「自分の学問・知識」の一部なのである。ただこの植物学の分野は、北国ドイツの植物にとっては不利な環境から、暖かい南国イタリアの地に変わることによって、きわめて大きな発展をする運命にあった。すなわち Goethe は、出発そうそうアルプスという、植物にとってヴァイマルとはきわめて大きな環境の違いのある土地での植物を見て、高さや植物の成育、特にその形態の違いに眼を留めている。すなわちブレンナー峠での記述の中に、ずっと植物の観察を道中続けてきたこと、その中でも、

「Was mich noch aufmerksamer machte, war der Einfluß, den die Gebirgshöhe auf die Pflanzen zu haben schien. Nicht nur neue Pflanzen

fand ich da, sondern Wachstum der alten verändert; wenn in der tiefern Gegend Zweige und Stengel stärker und mastiger waren, die Augen näher aneinander standen und die Blätter breit waren, so wurden höher ins Gebirg hinauf Zweige und Stengel zarter, die Augen rückten auseinander, so daß von Knoten zu Knoten ein größerer Zwischenraum stattfand und die Blätter sich lanzenförmiger bildeten. Ich bemerkte dies bei einer Weide und einer Gentiana und... さらにいっそうぼくの注意をひいたのは、山の高さが植物に影響を及ぼすらしいという点であった。たんに新しい植物をそこに発見しただけではなく、これまでの植物でもその成長のしかたが変化しているのだ。低地では枝や茎が強くて太く、芽と芽のあいだが接近し、葉も広がったのに、山地へ登るにつれて、枝と茎は細くなり、芽と芽のあいだは離れ、したがって節と節との間隔が大きくなり、葉の形は楯のようになってきた。このことを柳とりんどうに認めたが・・・²⁹⁾]

ときわめて植物観察に経験のある観察をしている。またアルプスを越えると彼が読んだり聞いたりしてよく知っていたがまだその成育現場を見たことのない、レモンやオリーブなどのイタリアの植物を見て、感激している記述がちらちらに散らばっている。しかもバードヴァで植物園を訪問した時には、

「Hier in dieser neu mir entgegentretenden Mannigfaltigkeit wird jener Gedanke immer lebendiger, daß man sich alle Pflanzengestalten vielleicht aus einer entwickeln könne. Hiedurch würde es allein möglich werden, Geschlechter und Arten wahrhaft zu bestimmen, welches, wie mich dünkt, bisher sehr willkürlich geschieht. Auf diesem Punkte bin ich in meiner botanischen Philosophie steckengeblieben, und... ここでこうして新たに多様な植物に接してみると、あらゆる植物形態はおそらく一つの形態から発展するものであろうという例の思想が、いよいよ有力となってくる。この方法によってのみ、種や属を本当に決定することが可能となるのであろう。これまでではこの決定が非常に勝手になされているように思われる。この点でぼくは自分の植物哲学にはまりこんでしまい・・・²⁹⁾]

と書かれており、もうここでは「原植物」に至る「jener Gedankeあの考え」が頭をもたげている。この表現でもはっきり解るように、植物にたいする考え方はもう前期ヴァイマル時代に兆していたのである。それがイタリアの多様な植物の形態を観察するに及んで、一気に展開していったのである。

ところでこうした植物に関する記述は、美術・芸術の観賞に忙しかったロー

マではほとんど見られなくなる。ところが、Goetheが新たに植物の繁茂する春をローマで迎え、南イタリアへの旅を考えはじめるとそれを待っていたかのように再び植物の記述が姿を表す。2月19日には、

「...Nun kommen mir Blumen aus der Erde, die ich noch nicht kenne, und neue Blüten von den Bäumen; die Mandeln blühen und machen eine neue lustige Erscheinung zwischen den dunkelgrünen Eichen; der Himmel ist wie ein hellblauer Taft, von der Sonne beschienen. Wie wird es erst in Neapel sein! Wir finden das meiste schon grün. Meine botanischen Grillen bekräftigen sich an allem diesen, und ich bin auf dem Wege, neue schöne Verhältnisse zu entdecken, wie die Natur, solch ein Ungeheueres, das wie nichts aussieht, aus dem Einfachen das Mannigfaltigste entwickelt. さて大地からは、ぼくの知らない花が咲き出て、樹々には新しい花がついている。はたんきょうの花が咲き、濃緑のオーク樹の間に新しい浮き浮きした眺めを作っている。空は陽光に照らされた淡青色の琥珀織のようだ。ナポリはいったいどんなであろうか！たいがいのがすでに緑になっている。こういうものを見ると、ぼくの植物熱がまた高まってくる。そしてぼくは、自然というこのなんでもないように見える巨大なものが、単純なものからいかにして多様なものを生みだすのか、そういった新たな美しい事情を発見しようとする途上にある。」⁶⁰⁾

とGoetheは書く。そして2月22日にナポリへ出発するのである。そしてナポリでは、Goetheは、

「Wenn man in Rom gern studieren mag, so will man hier nur leben; ...ローマにいと勉強したくなるが、ここではひたすら生きたくなる。」⁶¹⁾

と書いているとおり、ヴェスヴィオ火山の登山、ポンペイの訪問、また社交などできわめて多忙な生活を送っているが、そうしたあい間に植物の記述がはめこまれている。そしてヘルダーに彼の植物の考えがもうすぐまとまりそうだということを伝えたがっている記述も見える。この南イタリアの地、Goetheが「Paradies天国」と呼んだナポリでは、Goetheの活動が活発になり、一種の生の高揚期に入り、様々な彼の考えも次々と新しい展開を見せ始めている。シチリアではホメロスの表現とこの土地の景観との一致の体験が、つまり詩と現実の一体化の体験が（古代ギリシアの再体験）なされているが、そうした精

神の高揚の中でパレルモで4月17日の記述に、

「... allein eh' ich mich's versah, erhaschte mich ein anderes Gespenst, das mir schon diese Tage nachgeschlichen. Die vielen Pflanzen, die ich sonst nur in Kübeln und Töpfen, ja die größte Zeit des Jahres nur hinter Glasfenstern zu sehen gewohnt war, stehen hier froh und frisch unter freiem Himmel, und indem sie ihre Bestimmung vollkommen erfüllen, werden sie uns deutlicher. Im Angesicht so vielerlei neuen und erneuten Gebildes fiel mir die alte Grille wieder ein, ob ich nicht unter dieser Schar die Urpflanze entdecken könnte. Eine solche muß es denn doch geben! Woran würde ich sonst erkennen, daß dieses oder jenes Gebilde eine Pflanze sei, wenn sie nicht alle nach einem Muster gebildet wären? ところが思いもかけず、せんだってからぼくの背後に忍びよっている別の幽霊がぼくをとらえたのだ。これまでは桶や鉢のなかでばかり、それも一年の大部分はガラス窓の向うでばかり見なれていたあまたの植物が、ここでは喜ばしげに生き生きと自由な空の下に立っていて、その使命を余すところなく果たしているので、それらの植物はぼくたちにとってますます明瞭なものとなってくる。こんなにいろいろな、新しい、また新たにされた姿を目のあたりになると、この一群のなかに原植物を発見できないだろうかという年来の気まぐれが、またもやぼくの心に浮かんだ。そういう植物がどうしてもあるはずだ! さもなければ、あれやこれやの形をとっているものが同じ植物であることがどうして認識できようか、もしそれらがすべて一つの規範Normにならって形成されているのでないとするならば。」

と「Urpflanze 原植物」のイデーがはっきりと言葉で表現される。そしてイタリア紀行中、この植物観察の中の最高の表現は、シチリアから再びナポリへ帰ってきてヘルダーに宛てて書いた5月17日の手紙の中に、

「Ferner muß ich Dir vertrauen, daß ich dem Geheimnis der Pflanzenzeugung und -organisation ganz nahe bin und daß es das einfachste ist, was nur gedacht werden kann. Unter diesem Himmel kann man die schönsten Beobachtungen machen. Den Hauptpunkt, wo der Keim steckt, habe ich ganz klar und zweifellos gefunden; alles übrige seh' ich auch schon im ganzen, und nur noch einige Punkte müssen bestimmter werden. Die Urpflanze wird das wunderlichste Geschöpf von der Welt, um welches mich die Natur selbst beneiden soll. Mit diesem Modell und dem Schlüssel dazu kann man alsdann noch Pflanzen ins Unendliche erfinden, die konsequent sein müssen, das heißt, die, wenn sie auch

nicht existieren, doch existieren könnten und nicht etwa malerische oder dichterische Schatten und Scheine sind, sondern eine innerliche Wahrheit und Notwendigkeit haben. Dasselbe Gesetz wird sich auf alles übrige Lebendige anwenden lassen. さらにぼくは君に打ち明けねばならぬが、植物繁殖および組織の秘密がだいぶはっきりしてきた。しかもそれは思いもよらぬほどに簡単なものである。このイタリアの空の下では、きわめて面白い観察ができる。萌芽発生⁶³の主要点を発見したが、じつに明白で疑念の余地のないものだ。その他の点もすべてだいたいわかっているのだから、なお二、三の点さえもっと明確になればいいのだ。原植物は世にも不思議な被造物で、このことでは自然そのものでさえ、これを発見したぼくを羨んでしかるべきだ。このモデルとそれを解く鍵とがあれば、そのあとは植物を無限に発明できるが、それらの植物は首尾一貫したものでなくてはならぬ。すなわち、そんな植物が存在しなくとも、存在する可能性があるもので、絵画や文学上の影像や仮象のようなものではなく、内的な真実性と必然性ともつものである。同様の法則はすべての他の生物にも適用され得るであろう。⁶³」

と書く。これは何という喜ばしい、誇らしい叫び声であろう。「自然そのものでさえ、これを発見したぼくを羨んでしかるべきだ。」には、Goethe の歓喜している表情さえ眼の前に浮かんでくる。この引用した二通の手紙は、彼が第二次ローマ滞在記を書くさいにも、引用している。そして彼が再びローマに帰ってから、芸術・美術の勉強のため、きわめて忙しかつたにもかかわらず、さらに植物観察を続けなければならなかったことを書いている。しかし引用した文面にもあるように、「原植物」の主要点は、パレルモでの思想の表出でなされているのである。

さてこうしてイタリア紀行の中の植物観察の記述を追ってきたわけであるが、ここでいま一度「ものの見方」の観点から見てみたい。と言うのも、先にも言ったようにこの一連の植物観察の記述には、きわめて具体的に Goethe の「ものの見方」の発展・深化の特徴が出ていると思えるからである。

すなわち、「原植物」の思想の核心は、すでに前期ヴァイマル時代に在った。これはシュタイン夫人への手紙にもまだ明白な表現にはなっていないが、ある。また引用したイタリア紀行のバードヴァの記述にも在った。従ってこうした思想がどのような経過をたどって「原植物」の思想へと発展していったかが、問題である。そこから見ると、例えば、ブレンナー峠では、山の高さと植

物の形態の関係への注目、特に枝や茎や芽と芽との間隔など、形態に着目している。また、同じ植物がドイツでは見られない姿で、つまり冬でも戸外で多様な形態をして栄えているのを見ている。同じものの多様な姿に驚いている。さらにイタリア紀行の第二次ローマ滞在記の7月の報告に、「Störende Naturbeobachtungen」の中では、彼が種子からの発芽、双葉を広げる様子、あるいは石竹の若芽の発育、特に花の中から花が再び咲く様子と若い枝の発育の様子の類似などに注目したことが書かれている。こうしたことを見てみると、一種の予感のような啓示、ここでは「植物は単純なものから多様なものを生みだしているのではないか？」という考えが、絶え間ない観察に次ぐ観察によって確かめられていっている。そしてその根本には、パレルモでの記述にも在るように、どの植物も根本的には、同じものの多様な姿に見えたからという事情がある。我々は、この小論の（その一）で、ファウストの中で、地霊という不思議な一種の化け物（表現は悪い。というのは地霊は何か神的な力であるが、それが表現されないから）を見た。ここでも Goethe は、一種の化け物を見ているのである。イタリア紀行では、第二次ローマ滞在中で、老 Goethe は、これを「der wahre Proteus」と呼んでいる。つまりありとあらゆるものに変身できる力をもつものである。リンネの分類から始めて、Goethe は、その対極ともいうべきあらゆる植物の根源同一性に至ったのである。

ところでこの植物観察の成果は帰国後に「植物変態論 Die Metamorphose der Pflanze」にまとめられたので、我々はもっと明確に Goethe がどのように植物を見たのかを知ることができるのであるが、それによると、種を越えてすべての植物の葉に同一性を見ていることと、また同じ植物の双葉、一般的な葉、萼、花冠、雄蕊、雌蕊と成長するこれらの一連のものも葉の変態である、即ちここにも葉の同一性を見ていること、この二点に集約できよう。これは簡単に言えば植物を固定的に見ずに、上で表現は悪いが、化け物といったが、そのようにありとあらゆる形態に変化する力、Goethe の言葉ではプロテウスと見ていることである。根源的な「葉」があらゆる植物の葉の原型であり、また同一の植物の双葉、葉、萼、花冠、雄蕊、雌蕊と成長する様々な形も根源的な「葉」の変化である。ここに Goethe の「ものの見方」の原型がある。結局生

命そのものは捉えられない。なぜなら我々の眼前で絶え間なく千変万変する形だからである。しかしその変化する形に、生命の発生に Goethe の眼は見入るのである。そしてその変化に一つの普遍的な法則性を見るのである。

さてこの法則性については別の問題であるので、ここでは扱わないが、この植物観察では、上で詳しく見てきたように、個々の植物の観察から始まって、植物全体へと観察が拡大し、個別的なもの、個性的なものを突き抜けて、一般的なもの、普遍的なものを見るまでに「ものの見方」が発展・深化していることを指摘しておきたい。

5-5 美術・芸術品に於ける「ものの見方」について

さて、Goethe がイタリア旅行中最大の眼目としていたと言ってもよいこの美術・芸術品の面に於ても、先に述べた多くのことと同様に前期ヴァイマル時代に培った「ものの見方」をしていることに変わりはない。特にローマ入りするまでの期間の記述にはそうした特徴が現れている。例えば、Goethe が最大級の感嘆の言葉を惜しまなかったパラーディオの建築に見られる記述には様々な建築の外形を一つの全体として捕え、その中心から彼の眼に、彼の心に語りかけてくるものに集中する姿勢が見えるが、これは、自然を観察する姿勢と同じである。その外、ローマ入りする直前に彼が見た三つの古代の遺跡の総まとめとして書いた記述にも、そうした遺跡の外的形象が彼の眼に、彼の心に訴えかけてくる点に集中する姿勢がある。あるいは、もっと身近なこと、例えばイタリアの喜劇がいかにか日常の自然な生活の生写しであるかとか、ヴェネチアの絵画の特徴である光が、運河の多い、水に戯れる光の多彩さといかに関連しているかとかの記述にも、こうしたものが生まれてきた、その源を考え、発生的な関連を捉えている「ものの見方」が認められる。あるいは初めてイタリアの地でラファエロのチェチリアを見たときも、芸術家の技法の発展を一つの「形成 Bildung」と見ている記述がある。

このように Goethe の「ものの見方」は、イタリア旅行の最初の時期に、この美術・芸術品の分野だからといって何か特別のものはないように見える。特にローマ入りまではそうである。しかし、ローマでは違ってくる。先ず圧倒的

にその量が違う。幻惑するほどにローマの美術・芸術品が彼の内部に殺到してくる。彼は自分が内部から作り変えられているように思う。実に多くの美術・芸術品の観察がなされる。それだけではない。スケッチ、画家からの多くの教え、遠近法などの絵そのもの勉強というように徹底的に行われる。そしてこうした観察はただなされたままには終わらず、思想へと高められる。第一次ローマ滞在の終わりころの記述には、彼の美術・芸術品の「ものの見方」が形成されつつあることを暗示する美術・芸術品の「ものの見方」の考えが書かれている。またこれと同時に、外の美術・芸術品の観察と相まって、自分の内部に対する自覚、芸術家としての自覚が深まってくる。こうして植物観察の時とは、また違った「ものの見方」の発展・深化がなされる。

さてこの美術・芸術品の面での「ものの見方」を追ってみようとする、幾つかの問題に突き当たる。ここで先ずそうした問題について特に二つの問題を指摘しておきたい。

さてその問題の一つは、

「Die Kunst ist deshalb da, daß man sie sehe, nicht davon spreche, als höchstens in ihrer Gegenwart. 美術とは、それを見るためにあるもので、それについて語るためにあるものではない。語るとしてもせいぜいそれを眼の前にしてでなければ語ってはならぬ。」⁶⁴

と言っているように、我々はイタリア旅行の美術・芸術品の前にいるわけではない。特に筆者は、その幾つかを美術の画集本のコピーで知っているにすぎない。植物なら、ある程度実物を正確に判断できよう。しかし美術・芸術品については、難しい。しかしながら、我々は、現物なしでイタリア紀行の記述を追っていかざるを得ない。あとでこの小論を読む人がもし何か説明不足のような感を抱くなら、それはまずここに原因があろう。

次に問題なのは、Goethe 自身、植物観察の時とは違って、絵については単なる観察者ではすまなかった。植物観察の場合のリンネのように、Goethe はイタリアの美術・芸術品の理解のためにヴィンケルマンの本を持参していたが、彼は学者ではなく（後年エッケルマンに自分には画家の才能が欠けていることを告白したが⁶⁵）、このイタリアでは何千枚ものスケッチを描かざるを得なかつ

た。ここには、観察者としての問題だけでなく、実作者として、芸術家としての問題がある。さきに少しこの問題に言及したが、Goetheは、イタリアで自分が芸術家であることを深く自覚した。この自覚の過程と「ものの見方」の発展・深化の過程が相互に関係している。ここにはきわめて微妙な問題があるように思われる。

さてこうした問題があることに心をとめながら、この美術・芸術品の面でのGoetheの「ものの見方」を見てみよう。

先ず第一にGoetheのこうした美術・芸術品を見る姿勢である。Goetheはいつも虚心坦懐に美術・芸術品の前に立つ。そして彼の眼に、彼の心に訴えて来るものを見ようとする。例えば、ポーニアでラファエロの聖アーガタを前にして、彼は自分のイフィゲーニエにもこの聖女が語らないようなことは語らせないと誓う。それほどしっかりとこの絵を彼の眼底に刻みこんでいる。あるいはまた、例えば、ローマ入り直前の10月27日の記述にも、

「Was bin ich nicht den letzten acht Wochen schuldig geworden an Freuden und Einsicht; aber auch Mühe hat mich's genug gekostet. Ich halte die Augen nur immer offen und drücke mir die Gegenstände recht ein. Urteilen möchte ich gar nicht, wenn es nur möglich wäre. 最近の八週間に、ぼくはどれほど多くの喜びを味わい、見識を広めたことであろう。しかし辛苦もまた十分になめさせられた。ぼくはいつもただ眼を見開き、対象を正しく自分の印象に刻みつける。できることならば、判断などはいっさい加えたくないと⁸⁶思う。」

と振り返っているが、ここにも真剣な「ものの見方」の姿勢が示されている。Goetheはローマ入りする直前、美しい孔雀か極楽鳥のような多彩な色をした羽のキジを満載した舟に乗って港へ帰る夢を見たが、このイタリア旅行で数々の成果を持ってドイツへ帰ったが、思うに特にイフィゲーニエ、エグモントの完成、タッソー、ファウストなどの一部完成などと並んで、最も貴重な持参物は、こうした彼の心に刻み込まれた数々のイタリアの美術・芸術品の像(Bild)ではなかったか。彼は後で詳述するが、美術・芸術品の「ものの見方」の考え方もイタリアの地で得たが、最大の成果は、こうした美術・芸術品の像であったと思われる。例えば彼のライフワークのファウスト第二部のドイツ人たる

ファウストとギリシアの美そのものであるヘレナとの結婚という構想はイタリア旅行なしには考えられないであろう。

さてともあれ Goethe はイタリアの美術・芸術品の前に虚心坦懐に立って像に見入る。しかしイタリアの美術・芸術品はどうであったか。一面では、こうした人類の宝も時の中を生きる運命を逃れられない。そういう意味ではまた美術・芸術品も一つの生き物である。Goethe が見た古代の遺跡、円形劇場や水道などを始めとして多くのイタリアの美術・芸術品は、時の荒廃・腐敗・無情のなかに生きていた。イタリア紀行の記述にもしばしばこうした痛ましい美術・芸術品の跡が見られる。例えば、教会の壁画は、そこを訪れる信者の捧げる蠟燭の油煙に黒ずみ、誰もそれを不思議とは思わない。またしばしば美術・芸術品の保存が悪いという記述が見える。それどころかローマそのものが廃墟の中の廃墟なのである。ローマ入り直後に Goethe は、

「Gestehen wir jedoch, es ist ein saures und trauriges Geschäft, das alte Rom aus dem neuen herauszuklauben, aber man muß es denn doch tun und zuletzt eine unschätzbare Befriedigung hoffen. Man trifft Spuren einer Herrlichkeit und einer Zerstörung, die beide über unsere Begriffe gehen. Was die Barbaren stehenließen, haben die Baumeister des neuen Roms verwüstet. しかし白状すると、新しいローマから古いローマを選びわけることは、困難な、それに悲しい仕事なのである。しかしどうしてもそれをしなくてはならない。そして最後に来るはかりしれぬ満足感を期待せずにはいられない。この地ではぼくらの想像をこえるほどの、壯観と破壊の両方の痕跡に出会う。未開人がそのままに残しておいたものを、新しいローマの建築師たちが荒廃させてしまったのだ。⁽⁸⁷⁾」

と書くが、この一例だけでなく、Goethe はさまざまなものに見た、時の荒廃をこの美術・芸術品にも見ている。こうした中で真実の美術・芸術品の形を見極めるのはそんなに簡単なことではなかったろう。

その外にまたローマはあまりにも見るものが多かった。Goethe はいたるところに、例えば町の通りのいたるところに画材を発見している。こうしてローマ入りからの記述を追ってゆくとおぼろげではあるが、彼の「ものの見方」の姿勢を追跡できるように思われる。

先ずローマ入りまでは、基本的には前期ヴァイマール時代に培った「ものの

見方」に従っていたように思われる。そうして特に彼が頼りにしたのは、ヴェネチアの成立過程に見られる「ein notwendiges unwillkürliches Dasein 必然的で、恣意的でない存在⁽³⁸⁾」（9月29日）、ヴェローナの墓石に彫られた人物像を見て、「Von späterer Kunst sind sie, aber einfach, natürlich und allgemein ansprechend. それらは、後世の作ではあるが、素材で自然で、みんなの心に訴えかけてくる⁽³⁹⁾。」と思った、平凡だが昔から変わらぬ生活の普遍的な現在性、ヴェネチアの海岸で見た「Was ist doch ein Lebendiges für ein köstliches, herrliches Ding! Wie abgemessen zu seinem Zustande, wie wahr, wie seiend! 生物とはなんと貴い、すばらしいものだろう！なんとよくその状況に適応し、なんと真実に存在していることであろう！⁽⁴⁰⁾」という感嘆に盛られた真実感、テルニで書かれた、三つの古代遺跡を見て感じた、「was nicht eine wahre innere Existenz hat, hat kein Leben und kann nicht groß sein und nicht groß werden. 真の内的存在をもたないものは、生命をもたず、偉大であるわけがなく、偉大になることもできない⁽⁴¹⁾。」といった記述に見られる、彼の眼に、彼の心に訴えてくる内的感覚であった。この内的感覚が彼の美術・芸術品の観察の始めにある。

しかしローマ入りすると、彼はこうした美術・芸術品から受けた印象を考察するのを止めている。あまりにも多くの様々な形象がどっと押し寄せてきたからであろう。「Und so laßt mich aufraffen, wie es kommen will, die Ordnung wird sich geben. だから、なりゆくままに身を興奮にゆだねよう。秩序はおのずからあたえられよう⁽⁴²⁾。」と11月10日の記述にある。こうした記述のあとしばらくすると、12月2日には、「Ob ich gleich noch immer derselbe bin, so mein' ich, bis aufs innerste Knochenmark verändert zu sein. ぼくは相変わらず同じ人間ではあるが、最も内奥の骨の髄までも変化したつもりである⁽⁴³⁾。」とか、12月3日には、「Ich zähle einen zweiten Geburtstag, eine wahre Wiedergeburt, von dem Tage, da ich Rom betrat. ぼくがローマに足を踏み入れたその日から、ぼくの第二の誕生日、真の再生がはじまっているからだ⁽⁴⁴⁾。」とか、12月13日には、「gewiß, man hat außer Rom keinen Begriff, wie man hier geschult wird. Man muß

sozusagen wiedergeboren werden,... いかにもここで教化されるかは、たしかに、ローマのそとでは理解できない。人はいわば生まれ変わらねばならぬ。⁽⁴⁵⁾ という内奥からの変化を述べる言葉が続く。そしてさらに美術・芸術品の観察が続き、ローマ滞在も長くなってき、南イタリアへの旅行の計画が近づくに従って、漸く美術・芸術品の「ものの見方」を我々が具体的に知る手掛かりをあたえてくれるような記述が現れる。これは、Goethe の観察に見られる一つのパターンである。即ち彼は、見たらそれを言葉に、思想に高めないではいられないのである。例えば、ローマ入りする直前にも、そうした一種の総反省が見られるし、植物観察でも同じような経過がある。

さてそうした記述の中を丹念に見ると、Goethe が「ものの見方」をどのようにしていたのか、いわば芸術家の工房を覗き見るような一文に出会う。

「Seit vierzehn Tagen bin ich von Morgen bis in die Nacht in Bewegung; was ich noch nicht gesehen, such' ich auf. Das Vorzüglichste wird zum zweiten- und drittenmal betrachtet, und nun ordnet sich's einigermaßen. Denn indem die Hauptgegenstände an ihre rechte Stelle kommen, so ist für viele mindere dazwischen Platz und Raum. Meine Liebchaften reinigen und entscheiden sich, und nun erst kann mein Gemüt dem Größeren und Echtsten mit gelassener Teilnahme sich entgegenheben. 二週間以来、ぼくは朝から夜まで動きまわっている。まだ見ていなかったものを探し求めている。最もすぐれたものは二度も三度も眺め、いまではいくぶんか整理がついてくる。つまり、主要なものがそれぞれ適当な位置を占めると、より価値の少ないたくさんのは、それらの間に取まってしまう。ぼくの愛好物は清められ決定される。そしていま初じめてぼくの心は落ち着きのある興味を感じつつ、より偉大なもの、最も純粋なものに向って高まっていくことができる。⁽⁴⁶⁾」

この記述はなにげなく書かれているが、しかしここには芸術家の選択が書かれているのではなからうか？つまり「だから、なりゆくままに身を興奮にゆだねよう。秩序はおのずからあたえられよう」と心のままに任された、Goethe の心を集められ、何度も何度も繰り返し見られた美術・芸術品の像は、Goethe 自身の心の中で自然に整理されてゆくというのである。4の「分類という自然科学の分析と詩人の自然への近づき方」に於ても述べたが、芸術家の心は、

それ自身に力があってほとんど無意識的に、より純粋な、真実なもの、より人間の心にかなるものに、即ち美に従って心に入ってきた像を整理する力があるに違いない。ほとんど無意識に多くの像を比較し、先に述べたあの内的感覚によって秩序づけるのである。こうした説明は何か唐突に聞こえるかもしれないが、そうではない。それは、次のような Goethe 自身の考え方から見ても、よく理解できるのではなからうか？

Goethe は、第二次ローマ滞在記では、こうした美術・芸術品を見る眼について、しばしば「美術・芸術品は単なる空虚な言葉でなくなった」という主旨のことを述べているが、つまり生きた感覚像として捕えていることを述べており、美術・芸術品に於ては、主眼が見ることにあり、理論にあるのではないことを示唆しているが、しかしまた彼の植物観察と同じように、芸術についても理論化したい意欲を持った時期があった。ただ Goethe は、自分が芸術家であると自覚していたので、あまり理論が得意でなかったが、この第二次ローマ滞在期には、こうした仕事に打ってつけの人物がローマにいた。モーリッツである。Goethe は、モーリッツに植物変態についてローマで講述しているが、またローマで芸術についても論じた。この記念が、第二次ローマ滞在記の最後の所へ挿入された、モーリッツの「美の造形的模倣について」の一部である。「それはぼくたちの談話から生まれてきたもので、モーリッツがそれを彼一流のやり方で利用し、作りあげたのである。」と書いているように、これは Goethe がこの頃考えていた思想とはほぼ同じと思ってよいであろう。この挿入された論文の冒頭には、造形美術の天才の内部にどのように芸術衝動が生まれ、どのように発展してゆくかが述べられている。それによると、造形天才の内部に小さな一つの世界が、というより有機体世界ができる。これは、外部の世界と全く同じで、生まれながら絶え間なく外部世界の模倣を繰り返して成長する。いわば外なる自然という大世界に対する、人間内部に作られたミニ世界であるといっただけでよい。こうして小さいが、外の自然と同じ世界が、造形天才の、つまり人間の内部に造られると言うのである。こうして出来た小世界は、しかしある時、突然おのれの力を感じて、突然自己成長を始める。それが美の誕生である... という論である。これは、(その一)の若き Goethe の芸術論でも少し言及し

だが、Goethe の芸術発生の考え方ときわめてよく似ている。即ち「ズルツァーの『美術』」の中では、Goethe はこの小世界を宮殿という言葉で表しているが、ここで人間の内部に小さな外なる世界の Abbild が形成されること、その力は造形力であることを述べていた。つまり芸術家は、天才として自分の内部に外部世界とまったく違わない、小さな世界を作るのである。外の世界を絶え間なく模倣し、摂取しながら。そしてある時突然自己に目覚め、自己の内部の造形力によって芸術活動を始めると言う考えである。この考え方を今ここでイタリアの Goethe に当てはめると、上で述べてきた芸術家としての自覚の過程がきわめてよく理解されるように思われる。即ちローマ入りした Goethe は、彼がドイツで築いてきた内部世界（外部世界に対応する小世界）とあまりに違うイタリアの世界の中で再び、自分の内部世界の建て直しを行ったのである。それゆえに彼は、「再生」とか、「第二の誕生」とか、「骨の髄まで変わった。」とか、「生まれ変わらねばならない」とか述べるのである。これらの言葉は、内部の小世界が徐々に造り変えられていることを示している。そしてこうしてイタリア旅行によってすっかり、ドイツで築いてきた内部世界をイタリアの映像で建て直すのである。こう理解した時、我々はイタリア紀行にある、一連の美術・芸術品に関する心の発展・深化の記述を総体として、一つの形成 (Bildung) として見る事が出来るように思われる。

即ち Goethe の、例えば、イタリア入りした頃の言葉、

「Diese (Vorgänger) haben auf dem festen Boden der Wahrheit Grund gefaßt, sie haben die breiten Fundamente emsig, ja ängstlich gelegt und miteinander wetteifernd die Pyramide stufenweis in die Höhe gebaut, bis er zuletzt, von allen diesen Vorteilen unterstützt, von dem himmlischen Genius erleuchtet, den letzten Stein des Gipfels aufsetzte, über und neben dem kein anderer stehen kann. こうした先輩たちは、真理の堅固な地盤の上に基礎をおいたのだ。彼らは^し孜孜として、いや小心翼翼として広大な土台をすえつけ、互いに競い合いながら^{ピラミッド}金字塔を一段一段と築きあげていったのだ。そして最後にラファエロが、あらゆるこれらの利点に支えられ、この世のものならぬ守護神からの光を受けて、もはやその上にも横にも他の石をおくことのできない頂上の最後の石を載せたのである。⁽⁴⁷⁾」

には、人間の美術・芸術品の歴史を一つの「形成 Bildung」と考えていたことが窺えるが、このように Goethe は、他のことと同様に自分の外に一つの「形成 Bildung」を見ていた。しかしローマ入りし、多くの美術・芸術品の形象が彼の心に殺到すると、絵画を見た作用によって、多くの画家が長い歴史の中で、孜々として美の世界を造り続け、より美しい世界を完成させてきたのと同じように、何度も自分が内部から生まれ変わるほどの作用を受けていることを述べている。つまり自分の内部にも一つの小世界（若き Goethe の言葉では、宮殿）が形成されつつあるのを見ているのである。ローマを中心に多くの画家が孜々として、絵画の技法を高めてきた。それは一つの「形成 Bildung」の歴史である。そして自分もそうした人類の「形成 Bildung」の歴史の成果であるイタリアの美術・芸術品に触発されて、自分の内部世界の大きな「形成 Bildung」をなしとげていることを自覚しているのである。このように美術・芸術品の面では、外に一つの「形成 Bildung」を見ると同時に、自分の内部にも一つの「形成 Bildung」を見ている。

さてところで植物観察に於ける「ものの見方」でも、指摘したが、Goethe は始めのころ、個々のものにバラバラに見ていたこうした「形成 Bildung」をすべてのものに見るようになってくる。美術・芸術品についても事情は同じである。1月28日（1787年）の記述に、

「Ich habe eine Vermutung, daß sie (die Griechen) nach eben den Gesetzen verfahren, nach welchen die Natur verfährt und... ぼくの推測するところでは、彼ら（ギリシア人）は自然が処置するのと同じ法則にしたがって処置したのだ...」⁽⁴⁸⁾

とあるが、植物観察で見た「ものの見方」を美術・芸術品にもあてはめたことを述べている。さらにこの主旨のことを述べた個所がいくつか在るが、第二次ローマ滞在期間になると（この期間は観察の程度が高められていることを既に述べたが）、8月23日の記述には、

「Genug, es läuft darauf hinaus, daß mich nun mein hartnäckig Studium der Natur, meine Sorgfalt, mit der ich in der komparierenden Anatomie zu Werke gegangen bin, nunmehr in den Stand setzen, in der

Natur und den Antiken manches im Ganzen zu sehen,... つまり、ぼくの執拗な自然研究と、ぼくが比較解剖学の研究にとりかかったときの用意周到さが、いまや自然や古代美術品におけるいろいろなことを総体的に見る能力をぼくにあたえてくれているのだ。⁶⁸⁾

とあるように、自然と古代美術品に見る区別を設けていない。こうした様々なものに同じものを見る彼の独自の「ものの見方」は、第二次ローマ滞在の期間が長くなってくると、前述したように「mein Prinzip ぼくの原理」とか「Kapitalschlüssel マスターキー」とか呼ぶようになる。そしてついに9月6日には、

「Ich habe immer neue Gedanken, und da die Gegenstände um mich tausendfach sind, so wecken sie mich bald zu dieser, bald zu jener Idee. Von vielen Wegen rückt alles gleichsam auf e i n e n Punkt zusammen, ja, ich kann sagen, daß ich nun Licht sehe, wo es mit mir und meinen Fähigkeiten hinaus will; ぼくはつねに新しい思想を抱いている。周囲の事物が千種万様なので、それらはぼくをあるいはこの想念へ、あるいはあの想念へと呼びさますのである。多くの道筋から、すべてはいわば一つの点に寄り集まってくる。しかもぼくは自分と自分の能力とがどうなってゆくのかについて、いまや光明を見出していると言うことができる。⁶⁹⁾

と書く。「一つの点に寄り集まってくる」という表現は、具体的にどのようなものか、イタリア紀行には記してない。しかし今まで見てきたように、これこそイタリア入りした当初には、あれこれの個別的なものにバラバラに見ていたあの「形成 Bildung」の「ものの見方」である。こうして同じ日付の手紙には、Goethe のイタリア紀行の中で最高の言葉が吐かれる。

「Diese hohen Kunstwerke sind zugleich als die höchsten Naturwerke von Menschen nach wahren und natürlichen Gesetzen hervorgebracht worden. Alles Willkürliche, Eingebildete fällt zusammen, da ist die Notwendigkeit, da ist Gott. これらの高貴な美術品は同時に最も高い自然作品として、真実で自然な法則にしたがって人間の手で生み出されたものである。およそ恣意的なもの、虚妄なものはすべて崩壊する。そこには必然性がある、そこには神がある。⁶⁹⁾

この言葉こそイタリア紀行の「ものの見方」の発展・深化を最も明白に語る言

葉であり、また Goethe 自身が観察に観察を続けた果てに見つけたものである。若き Goethe は、詩と真実によれば、こんこんと湧き出てくる想像力を自然であるとみなした。すでに(その一)で引用したところである。しかし若き Goethe の想像力は、孤独の中で高く飛翔しようとした。眼前の生を見ずに、内に閉じこもろうとした。このため大きな危機にぶつかった。それを契機に Goethe は、前期ヴァイマル時代を通して外的自然を学んできた。直観的に若き Goethe は世界の根底に一つの力を見ていた。これはファウストの地霊が示している。また若き Goethe の世界観・芸術観にもあったように、世界の根底のこの力が造形力であることも予感していた。こうしたことを頼りに自然に近づいた Goethe は自然の様々なものに「形成 Bildung」を見ていた。個々のものに、バラバラに見ていた。しかし今まで見てきたように、イタリアに於て外部の世界に「形成 Bildung」を見るとともに、自分の内の世界が大きく、生まれ変わるほど変わってゆくにつれて、Goethe の観察は、個々のものに見ていた「形成 Bildung」をすべてのものに見るようになった。こうして Goethe の眼は、個々のものの観察を突き抜けて、全体を見るようになったのである。上で引用した言葉は、この意味で Goethe の「ものの見方」の発展・深化という長い道程の一つの記念碑である。ここには、もはや若き Goethe の燃え上がるような想像力の高揚はない。北国ドイツの暗い孤独の中で燃え上がった美は、否定されている。イタリアの長い歴史の中で人類が孜孜として求めてきた、普遍的な、生命の形が直観されている。

6 おわりに

さて、きわめて概括的にはあるが、またかなり芸術・美術や自然科学などの方面に偏ってはいるが、Goethe の「ものの見方」を見てきた。ここにそれをまとめてみる。

Goethe の「ものの見方」の基本に在るのは、先ず《Gott・Natur》である。彼はすべてのものの根底に、それが人間であろうと、芸術品であろうと、植物であろうと、事物であろうと、人間が畏敬の念を持つようなもの、即ち《神》を感じていた。そして本質直観とも呼ぶべきような、この種の直観にきわめ

て優れていた。例えば、シュトラースブルクの大聖堂を見て、計画には在ったが、実現できなかった部分を直観で認識したが、このように事物の本質を素早く見抜き、それを表現しようと努める。そしてこうしたものの本質には、何か人間の力を越える力を感じていたが、これは、生命の中の生命とでも呼ぶべきもので、非常に若い時から、造形力のあるものであるという認識があった。イタリア紀行で言えば、真剣な考えではないと断りながらも、彼は、アルプスのような高山の上方に起こる急激な天候の変化を起こす原因を、普通人が死んだものと見なしている山々にもその奥底には、何か脈動する力があって、そのためではないかと述べているが、こうした笑いの機会を読者に提供するような記述にも、Goethe が事物の根底に何か造形的な力を見える特徴が出ている。そしてこのように事物の根底に神を啓示する何かを認めていた。彼は、青春期に於てはどれほど意識的にそれを知っていたかは問題であるが、自分の内奥にもそうした力を感じていた。これが、詩と真実にあった創作力(想像力)である。彼はこの上に自分を築こうと考えたと詩と真実に在る。もちろんその外のもの、例えば、前期ヴァイマル時代に始めた博物学にも、基本にはこの見方がある。従って地質・岩石・地形などもこう見ていた。この小論にも引用した、ドナウ河の大昔の潮の干満が地形を造ったという記述はその例である。また植物にもその根源に同じ造形力を見ている。動物学では、イタリア旅行の後、植物学の「変態論」の考えに触発されて、いわば動物に於ける変態論である、「動物の骨は、脊椎の変態である」とする考え方に現れている。それゆえ Goethe は、あらゆるものの根底に神聖な造形力を見ていたから、あらゆるものは、形成 (Bildung) であると見ている。そして記述する時は、現象が現れてくる順序に従うので、時間的な順序で説明する (Goethe の記述には発生を説明するという特徴がある)。しかし考え方は、この逆で根源へ根源へと遡ってゆくやり方である。そしてものの外形は、内に内在する造形力の現れであるから、その根源的な力を知らんがために、眼でものの外形をきわめて熱心に観察する。つまり外形をまるで透かして内なるものを捉えんとするような「ものの見方」である。従って、こうした理由から事物を固定的には捉えない。絶えず事物の根源にある「神を啓示するもの」を見ようとするので、当然事物を生きたもの

として、形を変容させるものとして見ようとする。これは、近代の物理学、特にニュートンのそれのように、ものを一つ機械であると考えようという見方とは大いに違う。ここに彼の詩人性が働いている。現代でもこうした「世界＝大きな機械」であるとする考え方が自然科学の考え方の根底にあると思われるが、してもものメカニズムを説明することに最大の重点が置かれているが、はたしてどうであろうか。Goetheは、例えば、植物は、絶え間なく変態しているものと捉えた。あるときは、みずみずしい双葉を出しており、またあるときは、ぐんぐんと成長を続ける姿であり、またあるときは、可憐な美しい花卉を開く姿を取る。またあるときは、何の変哲もない土くれのような種である。この見方には、いかにも詩人らしい、きらびやかに絶え間なく姿を変える命を直観した詩人の眼がある。我々人間も一瞬一瞬命の火を燃やして生きる、命なのである。こうした命あるものが命を見る、命の切なさ、命のきらびやかな変容を見つめ、その力に畏敬の念を感じた「ものの見方」がある。Goetheの「ものの見方」の根底には、こうした詩人性があるのである。

さて若き Goetheには、もうすでにこうした基本的な「ものの見方」があるが、しかし彼はこの期には、彼の天才で詩作し、考えた。この期には、天才的な直観的な「ものの見方」をしており、したがってきわめて独創的であるが、彼の精神が吹き込まれており、空想的、個性的、主観的であった。この期の作品には、瞬間的な美しさに輝いているところが、特徴である。しかし前期ヴァイマル時代に入ると、「ものの見方」の基本は変わらないが、その目指すところが変わってくる。もはや瞬間的なものは、移ろい易いものは、追われない。もっと永続的なもの、普遍的なものが追われる。花崗岩の小論は、その例である。しかしイタリアでは、もっと大規模に、もっと純粋に芸術・美術品の中で、こうしたものが追及される。イタリア紀行の表現でいえば、内的な真実のあるものが、追及される。

ところでイタリア旅行の始めには、上で述べた「ものの見方」は、個別的な観察に見られるが、Goetheがローマ入りし、外に多くのイタリアの美術・芸術品という人類が長い歴史の中で追及してきた美を観察し、同時にこうした外部の美によって触発され、自分の内部が生まれ変わったとまで言わざるをえな

いほどに自己の内部の「形成 Bildung」を果たし、自分の芸術家としての自覚が深まるにつれ、当初個々のものにバラバラに見ていたあらゆるものに「形成 Bildung」を、根源的な力を、神を見るほどになった。イタリア紀行の「ものの見方」の頂点は、9月6日の「そこには必然性がある。そこには神がある。」の表現にある。これこそ、イタリア紀行の観察の最高の表現であり、同時に Goethe の古典主義の始まりを告げている言葉である。

さて Goethe は、こうしてイタリアに於て彼の「ものの見方」の基盤をはっきりと知った。そしてこうした成果を持って、ドイツへ帰った。しかし眼の人 Goethe の最大のドイツへの持参物は、何と言っても彼の眼の底に刻みつけられた数々のイタリアの形象 (Bild) であったろう。あのローマ入りする直前に見た、美しい多彩な色の羽をしたキジを満載した舟に乗って港へ帰った夢のように。そしてこれこそ、Goethe もまたヨーロッパの文化史を流れてきた大河に合流したと言ってよい意味であろう。その象徴的意味をもっともよく表す例を述べれば、Goethe のライフワークであるファウストのなかのドイツ人の典型である主人公ファウストとギリシアの美そのものであるヘレナの結婚を考えれば良い。おそらく Goethe のイタリア旅行がなければ、Goethe はこうした構想ができたであろうか?しかしこれは、Goethe の「ものの見方」のテーマとは違ったテーマである。また他日を期したい。

Anmerkungen

- (1) 香川大学一般教育研究第27号(1985.3)に掲載。
- (2) Artemis 版ゲーテ全集 (以後 A.A. と略記する) B.8, S.685, Z.22-Z.25. 訳は、講談社世界文学全集19の小栗浩訳使用。以後「ヴィルヘルム・マイスターの演劇的使命」からの引用は同氏の訳を使用させていただく。
- (3) *ibid.* S.858, Z.32-S.859, Z.4.
- (4) *ibid.* S.859, Z.4-Z.8.
- (5) *ibid.* S.859, Z.18-Z.22.
- (6) Hamburg 版ゲーテ全集 (以後 H.A. と略記する) B.13, S.149, Z.17-Z.30. 訳は潮出版ゲーテ全集14野村一郎訳を使用させていただく。なお以後「Der Verfasser teilt die Geschichte meiner botanischen Studien mit.」からの引用は同氏訳使用。
- (7) こうした世界は、ヘルダーリンの世界が考えられる。

- (8) H.A.B.13, S.255, Z.33-S.256, Z.8. 訳は潮出版ゲーテ全集14永野藤夫訳を使用させていただく。
- (9) *ibid.*S.160, Z.23-Z.36.
- (10) H.A., B.13, S.55, Z.4.に「Aber diese trennenden Bemühungen, immer und immer fortgesetzt, bringen auch manchen Nachteil hervor. Das Lebendige ist zwar in Elemente zerlegt, aber man kann es aus diesen nicht wieder zusammenstellen und beleben. Dieses gilt schon von vielen anorganischen, geschweige von organischen Körpern.」と書かれている。
- (11) *ibid.*S.160, Z.37-S.161, Z.10.
- (12) *ibid.*B.11, S.148, Z.25-Z.26. 訳は、潮出版ゲーテ全集11巻イタリア紀行の高木久雄訳を使用させていただく。以後イタリア紀行からの訳は同氏版を使用させていただく。ただし、一部筆者が変更した個所がある。
- (13) *ibid.*B.13, S.162, Z.1-Z.8.
- (14) *ibid.*B.11, S.25, Z.10-Z.17.
- (15) *ibid.*S.98, Z.33-S.99, Z.2.
- (16) *ibid.*S.125, Z.16-Z.21.
- (17) Hamburg 版の Goethes Briefe Band II, S.32, Z.26-Z.32. 訳は、潮出版ゲーテ全集15巻の小栗浩訳を使用。(18), (19)も同じ。
- (18) *ibid.*S.20, Z.13-Z.19.
- (19) *ibid.*S.19, Z.6-Z.9. 訳の一部筆者変更。
- (20) H.A., B.11, S.60, Z.29-Z.30.
- (21) (14)と同じ。
- (22) 顎間骨の発見については、潮出版ゲーテ全集第14巻の訳注495ページ以下に詳しい。それによると、Goetheは、1784年3月27日に顎間骨を発見しているが(発表はだいぶ後)、後にフランス人の解剖学者 F.V.d'Azyr が1780年に発見していたことがわかった。
- (23) H.A., B.11, S.40, Z.17-Z.36.
- (24) *ibid.*S.10, Z.16-Z.23.
- (25) *ibid.*B.13, S.55, Z.10-Z.15.
- (26) *ibid.*S.33, Z.15-Z.26.
- (27) イタリア紀行の第二次ローマ滞在の9月6日前後の記述を見ること。
- (28) H.A., B.11, S.19, S.36-S.20, Z.7.
- (29) *ibid.*S.60, Z.30-Z.37.
- (30) *ibid.*S.174, Z.37-S.175, Z.8.
- (31) *ibid.*S.208, Z.37-Z.38.
- (32) *ibid.*S.266, Z.25-Z.37.
- (33) *ibid.*S.323, Z.33-S.324, Z.10.
- (34) *ibid.*S.372, Z.29-Z.31.

- ③5 Eckermann: Gespräch mit Goethe の1829年4月10日を参照のこと。
③6 H.A., B.11, S.122, Z.10-Z.14.
③7 ibid.S.130, Z.23-Z.29.
③8 ibid.S67, Z.27.
③9 ibid.S42, Z.30-Z.32.
④0 ibid.S.93, Z.6-Z.8.
④1 ibid.S.122, Z.7-Z.9.
④2 ibid.S.135, Z.12-Z.13.
④3 ibid.S.146, Z.31-Z.32.
④4 ibid.S.147, Z.28-Z.30.
④5 ibid.S.149, Z.14-Z.16.
④6 ibid.S.171, Z.21-Z.29.
④7 ibid.S.103, Z.22-Z.29.
④8 ibid.S.168, Z.3-Z.5.
④9 ibid.S.386, Z.23-Z.27.
⑤0 ibid.S.394, Z.21-Z.26.
⑤1 ibid.S.395, Z.30-Z.34.
⑤2 (その一) の注参照。

(あとがき:この小論を作成するにあたって、Hamburg 版の E.Trunz の巻末の解説、ならびに木村直司氏の諸論文から有益な示唆を受けたことをおことわりしておきます。)